

リスク評価書（案）

No. __（初期）

ジフェニルアミン
(Diphenylamine)

目 次

本文	1
別添 1 有害性総合評価表	
別添 2 有害性評価書	

年 月

厚生労働省

化学物質のリスク評価検討会

1 1 物理化学的性質（別添2参照）

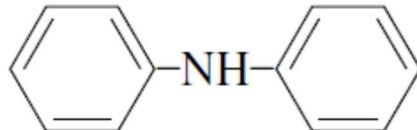
2 (1) 化学物質の基本情報

3 名 称：ジフェニルアミン

4 別 名：N-フェニルアニリン、N,N-ジフェニルアミン、N-フェニルベン
5 ゼンアミン、Diphenylamine、N-Phenylaniline、Anilinobenzene、
6 N,N-Diphenylamine、N-Phenylbenzamine

7 化学式：C₁₂H₁₁N / C₆H₅NHC₆H₅

8 構造式：



13 分子量：169.2

14 CAS番号：122-39-4

15 労働安全衛生法施行令別表第9（名称等を表示し、又は通知すべき危険物及び有
16 害物）第277号

17
18 (2) 物理的・化学的性状

19 外観：特徴的な臭気のある、無色の
20 結晶。

21 密度：1.2 g/cm³

22 沸点：302℃

23 蒸気圧：ほとんどない（20℃）

24 蒸気密度（空気=1）：5.8

25 融点：53℃

26 嗅覚閾値：0.05 ppm（0.35 mg/m³）

引火点（C.C.）：153℃

27 発火点：634℃

28 溶解性（水）：非常に溶けにくい

29 オクタノール/水分配係数 log Pow：3.5

30 換算係数：1 ppm=6.92 mg/m³（25℃）

31 1 mg/m³=0.145 ppm（25℃）

19

20 (3) 生産・輸入量、使用量、用途

21 生産量：約2,500トン（2016年、推定）

22 製造・輸入数量：1,000トン（平成28年度）

23 用途：有機ゴム薬品、染料（酸性及び硫化系及びセリトン染料）、火薬安定剤、
24 塩素系溶剤の安定剤、医薬品

25 製造業者：精工化学、白石カルシウム（ユニロイヤル・ケミカル）（輸入）、中
26 間物商事（輸入）

27

28 2 有害性評価の結果（別添1及び別添2参照）

29 (1) 発がん性

30 ○ヒトに対しておそらく発がん性がある

31 根拠：F344/DuCrI CrIj ラットを用いて、ジフェニルアミンの2年間（104週間）

32 にわたる混餌経口投与によるがん原性試験を行った結果、雄では脾臓の血
33 管系腫瘍の発生の増加傾向、並びに脾臓と皮下組織を含む全臓器の血管系
34 腫瘍の発生増加、雌では子宮に腺癌の発生の増加傾向が認められた。これ
35 らの結果から、ジフェニルアミンのラットに対するがん原性が示された。
36 B6D2F1/Crljマウスを用いて、ジフェニルアミンの2年間（104週間）にわた
37 る混餌経口投与によるがん原性試験を行った結果、雄では脾臓、並びに脾
38 臓及び肝臓等を含む全臓器に血管系腫瘍の発生増加が認められ、雄マウス
39 に対するがん原性が示された。雌マウスでは腫瘍の発生増加は認められず、
40 がん原性は示されなかった。

41
42 (各評価区分)

43 IARC：情報なし

44 産衛学会：情報なし

45 EU CLP：情報なし

46 NTP 14th：情報なし

47 ACGIH：A4（1996年設定）

48 根拠：アルビノラットによるジフェニルアミン、0.5%～1.5%226日間、
49 2.5%1年、10%～1.0%2年の混餌による経口連続摂取で腫瘍の発生率
50 はジフェニルアミンの取り扱いと関連していなかった。ビーグル犬に
51 対する2年間のジフェニルアミンの0.01%、0.1%、1.0%の混餌による
52 経口投与において、腫瘍は発生しなかった。

53
54 DFG MAK：カテゴリ－3B（2012年設定）

55 根拠：アニリンと同様に、赤血球毒性の二次反応を経て進行する作用の間
56 接的な発癌機構が有効であり得るが、最終評価に適した十分なデータ
57 がないが、芳香族アミンとしての化学構造に起因する発癌作用の疑い
58 により、発がん性カテゴリ－3Bに分類される。

59
60 ○閾値の有無：あり

61 根拠：遺伝毒性がないと考えられるため

62
63 NOAEL=250ppm（29mg/kg 体重/日）

64 根拠：雄ラットでは、4,000 ppm で脾臓及び全臓器における血管系腫瘍（血管
65 腫＋血管肉腫）及び血管肉腫の発生が、雌ラットでは、4,000 ppm で子宮
66 における腺癌の発生が増加している。雄マウスでは、1,000 ppm で脾臓及
67 び全臓器における血管系腫瘍（血管腫＋血管肉腫）の発生が増加している。

68 不確定性係数、種差（10）、がんの重大性（10）

69 評価レベル =2.44mg/m³

70 計算式：29mg/kg 体重/日×1/10×1/10×60kg/10m³×7/5（労働補正）

71

72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111

(2) 発がん性以外の有害性

○急性毒性

致死性

ラット

経口毒性：LD₅₀=1,120 mg/kg体重

マウス

経口毒性：LD₅₀=1,230 mg/kg体重

ウサギ

経皮毒性：LD₅₀>2,000 mg/kg体重

○皮膚刺激性／腐食性：あり

根拠：

- ・ Albinoウサギを用いた試験で、軽度の皮膚刺激がみられた。

○眼に対する重篤な損傷性／刺激性：あり

根拠：ウサギを用いたドレイズ眼刺激試験で、中程度の結膜刺激がみられた。

○皮膚感作性：なし

根拠：

- ・ モルモットに対する感作性試験で陰性の結果が得られている。
- ・ ヒトでは、ジフェニルアミンを用いたパッチテストで陽性反応を示さなかった。

○呼吸器感作性：判断できない

根拠：調査した範囲では、報告は得られていない。

○反復投与毒性（生殖毒性／遺伝毒性／発がん性／神経毒性は別途記載）

NOAEL = 2.5 mg/kg体重/日

根拠：ビーグル犬（1群雌雄各2匹）に0.01%、0.1%、1.0%（それぞれ2.5、25、250mg/kg体重/日に相当）のジフェニルアミン混餌飼料を2年間にわたって経口投与した。1年後、中用量及び高用量投与群では体重増加の著しい抑制が認められた。貧血症が高用量投与群では著しく、中用量投与群では中程度にみられた。2年後には、1.0%群において、赤血球の低浸透圧に対する抵抗性が中程度の低下を示した。1.0%群で中程度の肝障害が示された。NOAELは25mg/kg体重/日の用量で認められたヘモグロビン含量や赤血球数の軽微な減少に基づき、2.5mg/kg体重/日となる。

不確実係数 UF=10

112 根拠：種差 (10)
113 評価レベル=0.3 ppm (2.1 mg/m³)
114 計算式：2.5 mg/kg×1/10 (種差) ×7/5 (労働補正) ×60 kg (体重) / 10m³
115 (呼吸量) =2.1 mg/m³

116

117 ○生殖毒性：あり

118 NOAEL=46 mg/kg 体重/日

119 根拠：ラットによる 2 世代生殖毒性試験において、0,500,1500,5000ppm (F0
120 雄 0,40,115,399 mg/kg/日、F0 雌 0,46,131,448 mg/kg/日) を投与した。
121 F0 では、雄 5,000 ppm、雌 1,500 ppm 以上の投与群に腎臓、脾臓、肝臓
122 の重量増加が見られた。また、雌雄全ての投与群で脾臓の腫大と黒紫色化、
123 肝細胞肥大、脾臓の鬱血とヘモジデリン沈着等が認められた。児動物では、
124 1500ppm 投与群の F1 雌に体重増加抑制が、1500ppm 投与群の F2 に授乳
125 14 日及び 21 日に体重低下が見られた。これより、発生毒性の NOAEL は
126 500ppm (46mg/kg 体重/日) とされた。また、5000ppm 投与群で、両世
127 代における出生児数の減少が認められ、生殖毒性に関する NOAEL は
128 1500ppm とされた。

129 不確実係数 UF=10

130 根拠：種差 (10)

131 評価レベル=5.6 ppm (38.6 mg/m³)

132 計算式：46 mg/kg 体重/日×1/10 (種差) ×7/5 (労働補正) ×60 kg (体重) /10
133 m³ (呼吸量) =38.6 mg/m³

134

135 ○遺伝毒性：なし

136 根拠：チャイニーズハムスター肺線維芽細胞 (CHL/IU細胞) を用いた染色体
137 異常試験でS9mix非存在下において構造異常を示したが、ネズミチフス菌
138 を用いた復帰突然変異試験や不定期DNA合成試験、*in vivo*における小核試
139 験など、多くの試験で陰性の結果であった。

140

141 ○神経毒性：判断できない

142 根拠：調査した範囲では、報告は得られていない。

143

144 (3) 許容濃度等

145 ACGIH TLV-TWA : 10 mg/m³ (1996年設定)

146 根拠：ジフェニルアミンの職業ばく露許容濃度としてTLV-TWA 10 mg/m³
147 を勧告する。ジフェニルアミンを混餌投与したラット及びイヌで、腎臓、
148 肝臓及び血液疾患や皮膚や眼及び粘膜の刺激を最小化する値である。イ
149 ヌやラットを用いたジフェニルアミンの2年間の混餌投与で発がん性は
150 示さなかった。したがって、A4「発がん性物質として分類できない物質」
151 の注記が適当である。SkinあるいはSEN表示やTLV-STELを勧告するに

152 足る十分なデータはない。

153

154 日本産業衛生学会：設定なし

155 DFG MAK：5 mg/m³（2012年設定）

156 経皮吸収性：H（2012年設定）

157 根拠：反復投与からのNOAELは、イヌで2.5 mgジフェニルアミン/kg体重/
158 日、ラットで8 mgジフェニルアミン/kg体重/日であり、MAK値は低い値
159 を用いる。このため動物実験によるこのNOAELの値は、委員会の計算
160 手法を基に吸入暴露のMAK値として5 mgジフェニルアミン/m³と算出
161 される。

162

163 NIOSH REL：TWA 10 mg/m³

164 OSHA PEL：設定なし

165 UK HSE：TWA 10 mg/m³

166 OARS：設定なし

167

168 (4) 評価値

169 ○一次評価値：なし

170 発がん性が疑われ、遺伝毒性がなく、閾値がある場合であるが、動物試験によ
171 り導き出された評価レベルが二次評価値の1/10以上であるため。

172 ※一次評価値：労働者が勤労生涯を通じて週40時間、当該物質にばく露した場合に、
173 それ以下のばく露については健康障害に係るリスクは低いと判断する濃度。閾値のな
174 い発がん性の場合には過剰発生率10⁻⁴に対応した濃度で設定する等、有害性に即して「リ
175 スク評価の手法」に基づき設定している。

176 ○二次評価値：10 mg/m³

177 米国産業衛生専門家会議（ACGIH）が勧告している TLV-TWA を二次評価値
178 とした。

179 ※二次評価値：労働者が勤労生涯を通じて週40時間、当該物質にばく露した場合にも、
180 当該ばく露に起因して労働者が健康に悪影響を受けることはないであろうと推測され
181 る濃度で、これを超える場合はリスク低減措置が必要。「リスク評価の手法」に基づ
182 き、原則として日本産業衛生学会の許容濃度又はACGIHのばく露限界値を採用してい
183 る。

184

185 3 ばく露実態評価（ばく露評価小検討会での議論を踏まえ記載予定）

186

187 4 リスクの判定及び今後の対応（化学物質のリスク評価検討会での議論を踏まえ記
188 載予定）

有害性総合評価表

物質名：ジフェニルアミン

有害性の種類	評価結果
ア 急性毒性	<p><u>致死性</u></p> <p><u>ラット</u> 経口毒性：LD₅₀ = 1,120 mg/kg 体重</p> <p><u>マウス</u> 経口毒性：LD₅₀ = 1,230 mg/kg 体重</p> <p><u>ウサギ</u> 経皮毒性：LD₅₀ =>2,000 mg/kg 体重</p> <p><u>健康影響</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒトでは吸入及び皮膚接触により、膀胱への影響（詳細不明）、頻脈、高血圧、湿疹が生じ、食欲不振を示した。また、皮膚及び粘膜への刺激性がみられ、メトヘモグロビン血症や泌尿器への影響がみられるとの報告がある。 ・Syrian ハムスターでは、経口投与により、腎臓、胃及び脾臓で肉眼的病変がみられた。
イ 刺激性/ 腐食性	<p>皮膚刺激性/腐食性：あり</p> <p>根拠：Albino ウサギを用いた試験で、軽度の皮膚刺激がみられた。</p> <p>眼に対する重篤な損傷性/刺激性：あり</p> <p>根拠：ウサギを用いたドレイズ眼刺激試験で、中程度の結膜刺激がみられた。</p>
ウ 感作性	<p>皮膚感作性：なし</p> <p>根拠：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モルモットに対する感作性試験で陰性の結果が得られている。 ・ヒトでは、ジフェニルアミンを用いたパッチテストで陽性反応を示さなかった。 <p>呼吸器感作性：調査した範囲では、報告は得られていない。</p>
エ 反復投与毒性（生殖毒性/ 遺伝毒性/発がん性/神経毒性は別途記載）	<p>NOAEL = 2.5 mg/kg 体重/日</p> <p>根拠：ビーグル犬（1群雌雄各2匹）に0.01%（2.5 mg/kg 体重/日に相当）、0.1%（25 mg/kg 体重/日に相当）、1.0%（250 mg/kg 体重/日に相当）のジフェニルアミン混餌飼料を2年間にわたって経口投与した。1年後、中用量及び高用量投与群では体重増加の著しい抑制が認められた。貧血症が濃度依存的にみられ、高用量投与群では著しく、中用量投与群では中程度であった。2年後には、1.0%群において、赤血球の低浸透圧に対する抵抗性が中程度の低下を示した。618から627日目にかけて行われたスルホプロモフタレイン試験による肝機能検査で、1.0%群で中程度の肝障害が示された。NOAELは25 mg/kg 体重/日の用量で認められたヘモグロビン含量や赤血球数の軽微な減少に基づき、2.5 mg/kg</p>

体重/日となる。動物には、肝小葉周辺脂肪変性と脂肪含量の増加を伴った肝臓重量の増加、脾臓や腎臓及び脊髄おける軽度のヘモジデリン沈着、及び腎臓重量の軽微な増加も認められた。

不確実係数 UF = 10

根拠：種差 (10)

評価レベル = 0.3 ppm (2.1 mg/m³)

計算式：吸入による無毒性量 = 2.5 mg/kg × 1/10 (種差) × 7/5 (労働補正) × 60 kg (体重) / 10m³ (呼吸量) = 2.1 mg/m³

(参考)

NOAEL = 7.5 mg/kg 体重/日

根拠：SD ラット (1 群雌雄各 60 匹) に、雄には 0、200、750、3,750、7,500 ppm (0、8.1、29、150、300 mg/kg 体重/日に相当)、雌には 0、150、500、2500、5,000 ppm (0、7.5、25、140、290 mg/kg 体重/日に相当) の濃度になるように調整したジフェニルアミン (純度 99%超) を 2 年間混餌投与した。各群、雌雄 10 匹のラットは 1 年目に途中剖検した。投与に関連した死亡率はなかったが、対照群と低用量群での死亡率が増加したため、観察は 102 週で終了となった。雌雄の高用量側 2 群の死亡率は対照群より低かった。体重や体重増加は、高用量側 2 群で低かった。最初の 1 週を除き摂餌量に減少はみられなかった。赤血球数及びヘモグロビン含量は、3,750 ppm 以上の群の雄で、26 週の時点及び試験終了時には減少した。雌では、赤血球数、ヘモグロビン含量及びヘマトクリット値が、2,500 ppm 群以上の群で投与期間のほぼ全体を通じて、また試験終了時点で減少した。赤血球数、ヘモグロビン含量及びヘマトクリット値の減少は、750 ppm 群の雄及び 500 ppm 群の雌でも認められたが、散発的な減少であった。赤血球容積及び赤血球ヘモグロビン含量は、750 ppm 以上の群の雄及び 2,500 ppm 以上の群の雌で増加した。脾臓の絶対及び相対重量は、2,500 ppm 以上の群の雌で途中剖検時と試験終了時に増加が認められた。脾臓重量の同様の影響は 7,500 ppm 群の雄でもみられた。肝臓の相対重量は試験終了時の 5,000 ppm 群の雌や途中剖検時の 2,500 ppm 以上の群の雌で増加したが、雄では肝臓重量の増加はみられなかった。750 ppm 以上の群の雄と 500 ppm 群の雌で剖検時に脾臓の暗色化や肥大化が認められた。顕微鏡観察では、腎臓の色素沈着発生率が用量依存的に増加し、7,500 ppm 群の雄では 44/50、雌では 44/52 に達していた。肝臓での髓外造血や色素沈着発生率は用量依存的に増加し、7,500 ppm 群の雄では各々 21/50 と 27/50、5,000 ppm 群の雌では 41/52 と 45/52 であった。赤芽球過形成は 3,750 ppm 以上の投与群の雄、2,500 ppm 以上の群の雌でみられた。脾臓の鬱血発生率は用量依存的に増加し、7,500 ppm 群の雄では 50/50、5,000 ppm 投与群の雌では 47/52 に達していた。NOAEL は、血液学的パラメータや脾臓、腎臓及び肝臓の病理組織学的所見により 150

	<p>～200 ppm であり、7.5 mg/kg 体重/日に相当する。</p> <p>不確実係数 UF = 10 根拠：種差 (10) 評価レベル = 0.9 ppm (6.3 mg/m³) 計算式：吸入による無毒性量 = 7.5 mg/kg × 1/10 (種差) × 7/5 (労働補正) × 60 kg (体重) / 10m³ (呼吸量) = 6.3 mg/m³</p>
オ 生殖毒性	<p>生殖毒性：あり</p> <p>NOAEL = 46 mg/kg 体重/日</p> <p>根拠：SD ラット (1 群雌雄各 28 匹) に、0、500、1,500、5,000 ppm (F0 雄ラットは 0、40、115、399 mg/kg 体重/日、F0 雌ラットは 0、46、131、448 mg/kg 体重/日に相当) のジフェニルアミン (純度 99.8%) を交配前 70 日間混餌投与した 2 世代生殖毒性試験が実施された。臨床症状 (雌雄における青みがかったケージ内の漏液と青みがかった被毛、主に雌で乳腺の膨張と触診可能なほどの外側・腹側の腫瘤) が 5,000 ppm 投与群でみられた。体重増加の抑制が 5,000 ppm 投与群では F0 雌雄及び F1 雌雄に、1,500 ppm 投与群では F0 雌雄及び F1 雌にみられた。摂餌量も 1,500ppm 以上の投与群で減少した。腎臓、脾臓及び肝臓重量の増加が雄では 5,000 ppm 投与群、雌では 1,500 ppm 以上の投与群にみられた。雌雄の全投与群には肉眼的観察で脾臓の腫大と黒紫色化が認められ、顕微鏡学的観察では近位曲尿細管における褐色色素沈着、肝細胞肥大、肝臓のクッパー細胞における褐色色素沈着、脾臓の鬱血とヘモジデリン沈着が認められた。以上の結果から、F0 の全身毒性の NOAEL は 500 ppm (雄では 40 mg/kg 体重/日、雌では 46 mg/kg 体重/日に相当) 未満、LOAEL は 500 ppm と同等かそれ未満であり、体重の低下が 5,000 ppm 群の F1 児動物では授乳中期間を通して 5,000 ppm 投与群の F2 児動物では授乳 4～12 日にかけて、ないしは 21 日において、1,500 ppm 投与群の F2 児動物では授乳 14 日及び 21 日に認められ、発生毒性の NOAEL は 500 ppm (母動物で 46 mg/kg 体重/日に相当) とされた。また、5,000 ppm 投与群では両世代における出生児数の減少 (F2 の出産において有意) が認められ、生殖毒性に関する NOAEL は 1,500 ppm (母動物で 131 mg/kg 体重/日に相当) とされた。</p> <p>不確実係数 UF = 10 根拠：種差 (10) 評価レベル = 5.6 ppm (38.6 mg/m³) 計算式：吸入による無毒性量 = 46 mg/kg × 1/10 (種差) × 7/5 (労働補正) × 60 kg (体重) / 10m³ (呼吸量) = 38.6 mg/m³</p>
カ 遺伝毒性	<p>遺伝毒性：なし</p> <p>根拠：チャイニーズハムスター肺線維芽細胞 (CHL/IU 細胞) を用いた染色体異常試</p>

	<p>験で S9mix 非存在下において構造異常を示したが、ネズミチフス菌を用いた復帰突然変異試験や不定期 DNA 合成試験、<i>in vivo</i>における小核試験など、多くの試験で陰性の結果であった。</p>
キ 発がん性	<p>発がん性：ヒトに対しておそらく発がん性がある</p> <p>根拠：F344/DuCr1Cr1j ラットを用いて、ジフェニルアミンの2年間（104週間）にわたる混餌経口投与によるがん原性試験を行った結果、雄では脾臓の血管系腫瘍の発生の増加傾向、並びに脾臓と皮下組織を含む全臓器の血管系腫瘍の発生増加、雌では子宮に腺癌の発生の増加傾向が認められた。これらの結果から、ジフェニルアミンのラットに対するがん原性が示された。</p> <p>B6D2F1/Cr1j マウスを用いて、ジフェニルアミンの2年間（104週間）にわたる混餌経口投与によるがん原性試験を行った結果、雄では脾臓、並びに脾臓及び肝臓等を含む全臓器に血管系腫瘍の発生増加が認められ、雄マウスに対するがん原性が示された。雌マウスでは腫瘍の発生増加は認められず、がん原性は示されなかった。</p>
ク 神経毒性	<p>判断できない</p> <p>根拠：調査した範囲では、報告は得られていない</p>
ケ 許容濃度の設定	<p>ACGIH TWA：10 mg/m³（1996年設定）</p> <p>根拠：ジフェニルアミンの職業ばく露許容濃度として TLV-TWA 10mg/m³を勧告する。ジフェニルアミンを混餌投与したラット及びイヌで、腎臓、肝臓及び血液疾患や皮膚や眼及び粘膜の刺激を最小化する値である。イヌやラットを用いたジフェニルアミンの2年間の混餌投与で発がん性は示さなかった。したがって、A4「発がん性物質として分類できない物質」の注記が適当である。</p> <p>SkinあるいはSEN表示やTLV-STELを勧告するに足る十分なデータはない。</p> <p>日本産業衛生学会：設定なし</p> <p>DFG MAK：5 mg/m³（2012年設定）、経皮吸収性：H（2012年設定）</p> <p>根拠：反復投与からのNOAELは、イヌで2.5 mg ジフェニルアミン/kg 体重/日、ラットで8 mg ジフェニルアミン/kg 体重/日であり、MAK値は低い値を用いる。このため動物実験によるこのNOAELの値は、委員会の計算手法（the List of MAK and BAT Valuesのsection I参照）を基に吸入暴露のMAK値として5 mg ジフェニルアミン/m³と算出される。</p> <p>NIOSH REL：TWA 10 mg/m³</p> <p>OSHA PEL：設定なし</p> <p>UK HSE：TWA 10 mg/m³</p> <p>OARS：設定なし</p>

有害性評価書

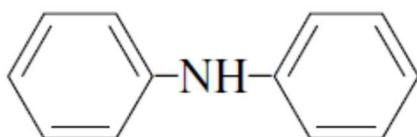
物質名：ジフェニルアミン

1. 化学物質の同定情報 (ICSC 2006 : NIHS 2018) (NITE CHRIP)

名称：ジフェニルアミン

別名：N-フェニルアニリン、N,N-ジフェニルアミン、N-フェニルベンゼンアミン
Diphenylamine、N-Phenylaniline、Anilinobenzene、N,N-Diphenylamine、
N-Phenylbenzamine

化学式：C₁₂H₁₁N / C₆H₅NHC₆H₅



分子量：169.2

CAS 番号：122-39-4

適用法規：労働安全衛生法施行令別表 9

(名称等を表示し、又は通知すべき危険物及び通知すべき有害物) 第 277 号

2. 物理化学的情報

(1) 物理化学的性状 (ICSC 2006 : NIHS 2018) (環境省 2006)

外観：特徴的な臭気のある、無色の結晶。 引火点 (C.C.) : 153°C

密度 : 1.2 g/cm³ 発火点 : 634°C

沸点 : 302°C 溶解性 (水) :

非常に溶けにくい

蒸気圧 : ほとんどない (20°C) オクターブ/水分配係数 log Pow : 3.5

相対蒸気密度 (空気=1) : 5.8 換算係数 : 1ppm=6.92 mg/m³ (25°C)

融点 : 53°C 1mg/m³=0.145 ppm (25°C)

嗅覚閾値 : 0.05 ppm (0.35 mg/m³) (ACGIH 2001)

(2) 物理的・化学的危険性 (ICSC 2006 : NIHS 2018)

ア 火災危険性 : 可燃性。火災時に刺激性あるいは有毒なフュームやガスを放出する。

イ 爆発危険性 : 空気中で粒子が細かく拡散して、爆発性の混合気体を生じる。

ウ 物理的危険性 : 粉末や顆粒状で空気と混合すると、粉塵爆発の可能性がある。

エ 化学的危険性 : 加熱や燃焼により、分解する。窒素酸化物などの有毒なフュームを生じる。強酸化剤及び強酸と反応する。

3. 製造・輸入数量/用途/製造業者

生産量 : 約 2,500 トン (2016 年推定) (化工日 2018)

製造・輸入数量 : 1,000 t (平成 28 年度) (経産省 2018)

41 用途：有機ゴム薬品、染料（酸性及び硫化系及びセリトン染料）、火薬安定剤、塩素系溶
42 剤の安定剤、医薬品（化工日 2018）

43 製造業者：精工化学、白石カルシウム（ユニロイヤル・ケミカル）（輸入）、中間物商事（輸
44 入）

45

46 4. 健康影響

47 【体内動態（吸収・分布・代謝・排泄）】

48 吸収・分布・排泄

49 ・ 経皮投与や吸入ばく露の吸収に関するデータは得られていない。リスクの判定においては、
50 経口投与による吸収を 100%とすることが推奨され、経皮及び吸入による吸収も、100%（デ
51 フォルト値）と仮定することになる。経皮吸収を 100%と仮定することは、ジフェニルアミ
52 ンの物理化学的性質（分子量：169 g/mol, logPow：3.4, 水溶性：40 mg/L）によって支持
53 される。潜在的に吸収性であることと、試験データが得られていないことから吸入による取
54 り込み量もデフォルトの 100%と仮定される（EU RAR 2008）。

55 ・ 雌雄の SD ラット（各 5 匹/群）に、コーン油に溶解した ¹⁴C-ジフェニルアミンを 5、750
56 mg/kg 体重（単回）、5 mg/kg 体重/日（14 日間反復）の用量で経口投与し、尿、糞、ケー
57 ジ洗浄液を投与から 4、8、12、24 時間後、その後は 24 時間間隔で 168 時間後まで採取し
58 放射能を測定した。168 時間後の放射能の回収率は 5 mg/kg 単回投与群では、雄で尿から
59 81%、糞から 9.1%、ケージ洗浄液から 9.2%、雌で尿から 72%、糞から 16%、ケージ洗
60 浄液 11%であった。また、750 mg/kg 単回投与群では、雄で尿から 74%、糞から 15%、
61 ケージ洗浄液から 4%、雌で尿から 73%、糞から 8.8%、ケージ洗浄液から 11%であった。
62 胴体及び各器官からの回収率の合計は、5 mg/kg 単回投与群及び反復投与群の雌雄ではい
63 ずれも 0.14~0.28%の範囲であり、750 mg/kg 単回投与群では、雄で 0.41%、雌で 0.28%で
64 あった。以上から、いずれの用量でも 70%以上が消化管から吸収され、主要排泄経路は尿
65 中であり、単回・反復いずれの投与方法、用量の高低いずれでも組織への蓄積（残留）は少な
66 いことが明らかになった（NITE 2008）。

67 ・ 経口投与されたジフェニルアミンはヒト、ラット、ウサギ、イヌ、ウシで速やかに吸収され
68 る哺乳類では少なくとも経口投与されたジフェニルアミンの 68~89%が吸収される。経皮
69 吸収のデータはないが、皮膚浸透値を、物理的性質を用いて算出したところ、ジフェニルア
70 ミンが経皮毒性を有する可能性が示唆された。その可能性については、ウサギを用いた経皮
71 試験により明示されており、その試験では、ジフェニルアミンが皮膚への閉塞塗布により経
72 皮的に吸収されたことを示す所見が観察された。すなわち、蒸留水を媒体としたジフェニル
73 アミンを用い、0、100、500、1,000 mg/kg 体重/日の用量で週 6 日経皮ばく露を行って剖
74 検したところ、中用量及び高用量群のウサギの胃に暗赤色の病巣が観察された（Sglin の試
75 験（1992）、EPA 報告書で引用されているが、原報告書は入手不可能であった）。肺からの
76 吸収に関するデータは得られていない（EU RAR 2008）。

77 代謝・排泄

78 ・ 雌雄の SD ラット（各 5 匹/群）に、コーン油に溶解した ¹⁴C-ジフェニルアミンを投与した。
79 5、750 mg/kg 体重の用量を単回強制経口投与、5 mg/kg 体重/日の用量を 14 日間反復強制
80 経口投与した実験で、単回投与、反復投与いずれも排泄物中の未変化体（ジフェニルアミン）

81 としては検出放射能の 2.7%以下であり、速やかに代謝されることを示した。排泄物中から
82 検出された代謝物は、4,4'-ジヒドロキシジフェニルアミン（非抱合体、O-硫酸抱合体、
83 O, O'-硫酸抱合体）、4-ヒドロキシジフェニルアミン（非抱合体、O-グルクロン酸抱合
84 合体、N-グルクロン酸抱合体、O-硫酸抱合体、O, N-グルクロン酸抱合体）、インドフェ
85 ノール（非抱合体、O-硫酸抱合体）、3-ヒドロキシジフェニルアミン、2-ヒドロキシジ
86 フェニルアミンの 12 種であった。尿中から検出された代謝物と未変化体の合計は性差及び
87 投与量の差はあるが、投与量の 82~92%であり、主に硫酸抱合体及びグルクロン酸抱合体
88 であった。ジフェニルアミンの代謝はベンゼン核のパラ位の水酸化、その後、硫酸抱合、グ
89 ルクロン酸抱合が行われ排泄されると考えられた。ジフェニルアミンの構造であるベンゼン
90 環が開裂したような代謝物は認められなかった（NITE 2008）（EU RAR 2008）（環境省
91 2006）。

92 ・ 雄の白色ラットに ^{14}C -ジフェニルアミン 5 mg/kg 体重を腹腔内投与し、24 時間単位で採
93 集した尿をシンチレーションカウンターで分析したところ、投与したジフェニルアミンの
94 75%が 48 時間以内に尿中に排泄された。 ^{14}C -ジフェニルアミン 5 mg/kg 体重（50%エタ
95 ノール水溶液に溶解）を静脈内投与したところ、6 時間後までに放射活性の 25%が胆汁中
96 で検出された（EU RAR 2008）（環境省 2006）。

97 ・ 雄のウサギにジフェニルアミン 1g(水懸濁液)を 9 日間にわたって 5 回経口投与した結果、
98 尿中から少量のジフェニルアミン、2-ヒドロキシジフェニルアミン、4,4'-ジヒドロキシ
99 ジフェニルアミン、4-ヒドロキシジフェニルアミンの O-硫酸抱合体及び O-グルクロン
100 酸抱合体が検出された（EU RAR 2008）。

101 ・ 雌雄のビーグル犬（各 2 匹ずつ）に 0、0.01、0.1、1.0%ジフェニルアミン混餌飼料を 2 年
102 間与え、尿及び糞中を調べた結果、4-ヒドロキシジフェニルアミン、4-ジフェニルアミ
103 ンの硫酸及びグルクロン酸抱合体、4,4'-ジヒドロキシジフェニルアミンが検出された。尿
104 及び糞中の代謝産物の違いや飼料に混ぜたジフェニルアミンの濃度による違いはみられな
105 かった。加水分解物である 4-ヒドロキシジフェニルアミンが胆汁中で検出された（EU
106 RAR 2008）。

107 ・ ヒト（2 人）にジフェニルアミン 100 mg を単回経口投与したところ、投与後 24 時間まで
108 収集した尿中に未変化体と 2 つの代謝物（4-ヒドロキシジフェニルアミンと 4,4'-ジヒド
109 ロキシジフェニルアミン）が検出されたが 2-ヒドロキシジフェニルアミンと N-ヒドロキ
110 シジフェニルアミンは検出されなかった（検出方法は薄層クロマトグラフィであったが、検
111 出限界は示されていない）（EU RAR 2008）。

112

113 代謝（ニトロソ化）

114 ・ 亜硝酸化合物を含む溶液を溶媒として極少量のジフェニルアミンを投与された患者におい
115 て、N-ニトロソジフェニルアミンが胃で生成された。*in vivo* のラット実験及び *in vitro*
116 のラット肝細胞を用いた実験による知見に基づく、N-ニトロソジフェニルアミンは次に
117 脱ニトロソ化されるものと結論付けられる（EU RAR 2008）。

118 ・ 24 匹のラットに 0.01%ジフェニルアミンと 0.15%亜硝酸ナトリウムを添加した飼料を与え、
119 30、60、120 及び 180 分後に 6 匹ずつ屠殺した。胃の幽門の内容物におけるジフェニルニ
120 トロソアミンの濃度を測定した結果、120 分後に最大量となる 37 μg のジフェニルニトロソ

121 アミン（胃の内容物 1g あたり）が検出された（EU RAR 2008）。

122 ・ 雌の Wistar ラットに、コーン油に溶解したジフェニルアミンあるいは *N*-ニトロソジフェニルアミンを各々 850 mg/kg 体重と 1,000 mg/kg 体重の用量で単回経口投与後、36 時間尿を

123 採集し分析した。その結果、4-ヒドロキシジフェニルアミンはジフェニルアミンの主な代

124 謝産物の一つであった。ジフェニルアミンの量は相対的に少なく（0.02～0.05

125 $\mu\text{mol}/\text{rat}/36\text{h}$ ）、*N*-ニトロソジフェニルアミンとともに、亜硝酸塩や硝酸塩が検出された

126 （EU RAR 2008）。

127

128 ・ ラットに 10 日間連続で 0.9～1.4 mg/kg 体重/日のジフェニルアミンを経口投与した。ジフ

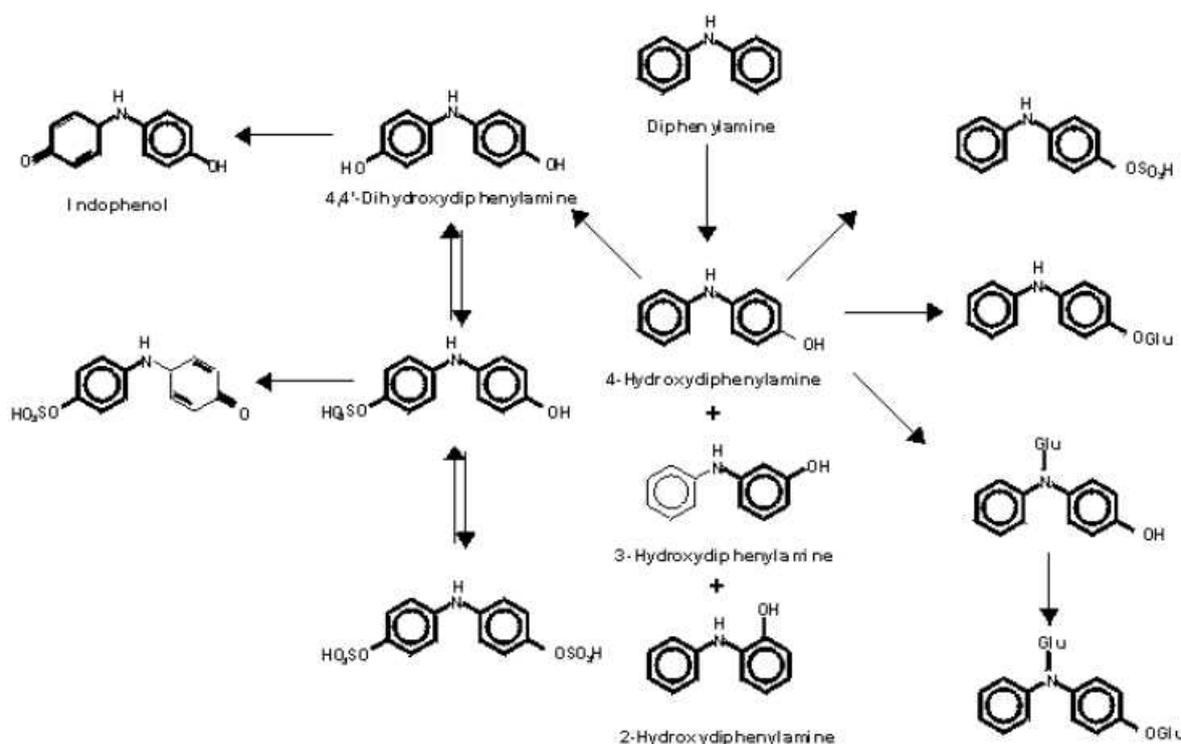
129 ェニルアミンを処置した後の肝臓における 2-デオキシグアノシンに対する 8-OH-2-デオキ

130 シグアノシンの量が、肝臓 DNA の HPLC 分析によって明らかにされた。すべての投与群

131 で 8-OH-2-デオキシグアノシンは対照群と比較して用量依存的に増加した。著者らはこの

132 結果から、ジフェニルアミンから細胞に遺伝学的損傷を与える活性酸素種が生成すると結論

133 づけた（EU RAR 2008）。



153 ジフェニルアミンの代謝経路図（EU RAR 2008）

154

155 (1) 実験動物に対する毒性

156 ア 急性毒性

157 致死性

158 実験動物に対するジフェニルアミンの急性毒性試験結果を以下にまとめる（RTECS

159 2015）（NITE 2008）（環境省 2006）。

160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199

	マウス	ラット	ウサギ
吸入、LC ₅₀	情報なし	情報なし	情報なし
経口、LD ₅₀	1,230 mg/kg 体重	1,120 mg/kg 体重 1,165～3,200 mg/kg 体重 >5,000 mg/kg 体重 雄 2,960 mg/kg 体重/日、 雌 2,480 mg/kg 体重/日	情報なし
経皮、LD ₅₀	情報なし	>5,000 mg/kg 体重	>2,000 mg/kg 体重

健康影響

【経口投与】

- 雄の Syrian ハムスター、ラット及びスナネズミ (1 群 10 匹) に、0、400、600、800 mg/kg 体重/日のジフェニルアミンを 1 日 1 回、3 日間連続で強制経口投与した。600 mg/kg のジフェニルアミンを経口投与したハムスター10 匹のうちの 6 匹及び 800 mg/kg 群のハムスター10 匹のうちの 5 匹は初回投与後に活動低下がみられ、投与 20 時間以内に瀕死状態に陥った。600 mg/kg 群の残り 4 匹及び 800 mg/kg 群の 2 匹は 2 回目の投与後 12 時間以内に死亡した。400 mg/kg 群では死亡例はなかった。600 mg/kg 群と 800 mg/kg 群のハムスターの腎臓は腫大し、広範囲にわたり褐色に変色していた。この変色は被膜表面からみることができ、皮質と髄質外層へと広がっていた。両群において黄褐色の変色が腎乳頭にのみ肉眼的に観察された。他の肉眼的病変は胃と脾臓に見られた(胃潰瘍、脾腫)。雄のラットとスナネズミに死亡例はなかったが、剖検によると、ジフェニルアミンを 800 mg/kg の用量で経口投与したラットのうちの 1 匹で腎乳頭の病変が認められたが、スナネズミでは所見は報告されていない (EU RAR 2008)。
- 雄ラット (1 群 10 匹) に、3,100 又は 5,000 mg/kg 体重/日のジフェニルアミンを単回強制経口投与した結果、14 日間の観察期間終了まで、3,100 mg/kg 群では死亡例は全く観察されなかったが、5,000 mg/kg 群では 3 日目から 4 日目にかけて 2 匹が死亡し、すべてのラットで立毛と一般状態の悪化がみられた (EU RAR 2008)。

イ 刺激性及び腐食性

- 2 匹の Albino ウサギの耳の内側表面にジフェニルアミン (純度不明) を 24 時間にわたって閉塞塗布した (溶媒を使用したかどうかの情報は示されていない)。7 日間観察した結果、刺激症状はみられなかった (EU RAR 2008)。
- 希釈していないジフェニルアミン 0.5 g をウサギの無傷の皮膚ならびに有傷の皮膚に塗布したところ、非常に軽微な一次皮膚刺激のみが示された。この試験についてさらなる情報は得られていない (EU RAR 2008)。
- ウサギを用いた最近の研究では、ジフェニルアミン (純度 99.9～100.1%) は皮膚刺激を示さなかったことが明らかになった (EU RAR 2008)。
- Albino ウサギを用いて、精製したジフェニルアミンの一次皮膚刺激試験が、EPA ガイドラインに則って行われた。6 匹のウサギの無傷の皮膚と有傷の皮膚各々 2 箇所ずつに、ジ

200 フェニルアミン 0.5 g を 24 時間閉塞塗布した後、軽微な影響がみられた。72 時間後の
201 最後の観察では、24 箇所のうち 6 箇所です非常に軽微な浮腫 (グレード 1) がみられた (EU
202 RAR 2008)。

- 203 ・ウサギの眼にジフェニルアミン 100 mg/匹を適用した試験で、軽度の虹彩炎及び中程度
204 の粘膜炎がみられ、10 日以内に回復した (NITE 2008)。
- 205 ・2 匹のウサギにおいて、ジフェニルアミン 50 mg を眼に滴下後のドレイズ眼刺激試験で
206 は、中程度の結膜刺激症状が検出された。2 匹のウサギのうち 1 匹で、観察から 7 日以
207 内に軽度から中程度の結膜刺激 (発赤及び浮腫) がみられた。これらの影響が、可逆的
208 か不可逆的かという情報は示されていない (EU RAR 2008)。
- 209 ・3 匹のウサギにジフェニルアミン 0.1 g を付けるドレイズ眼刺激試験が行われた。この試
210 験は最新の EU と OECD ガイドラインに準拠している。角膜混濁、発赤、分泌物及び虹
211 彩炎はドレイズ評点法により分類された。EU 分類法と同様に、角膜と結膜の損傷の回
212 復時間が 21 日より長い場合は、強い刺激性を持つ物質と分類した。この試験では、角膜
213 病変や刺激性あるいは眼の損傷が投与後 21 日目以降も持続することから、ジフェニルア
214 ミンには眼に対する腐食性があると分類された。しかし、ドレイズ評価の数値と影響に
215 ついて提示されていない (EU RAR 2008)。
- 216 ・6 匹のウサギを用いて、精製したジフェニルアミン 0.1 g の眼刺激試験では軽度から中程
217 度の影響が観察された。この試験は EPA ガイドラインに則って行われた。24 時間後、
218 軽度の虹彩炎 (1 匹のみであり、評点は 1) と軽度から中程度の粘膜炎を発症した。ドレ
219 イズ評点の平均は、24、48、72 時間後、4、7 日後で結膜発赤は 1.2、1.2、1、0.4、0.2
220 であり、結膜浮腫は 1、1、1.5、1.5、0.2 であった。観察期間が進むにつれ、これらの
221 影響は徐々に消失していった。10 日後、処置した眼は全て正常状態に回復した (EU RAR
222 2008)。
- 223 ・1 匹のウサギにジフェニルアミン (純度 99.9~100.1%) 0.1 g を 7 日間、眼の洗浄を行
224 わずに処置した後、腐食性がみられ、角膜混濁が生じた (EU RAR 2008)。

225

226 ウ 感作性

- 227 ・純度 99.9% のジフェニルアミンは、モルモットで皮膚感作が見られなかった。皮膚感作
228 性に関して、他にデータはない (EU RAR 2008, NITE 2008)。

229

230 エ 反復投与毒性 (生殖毒性、遺伝毒性、発がん性、神経毒性は別途記載)

231 吸入ばく露

- 232 ・動物を用いた吸入ばく露による反復投与毒性試験のデータはない (EU RAR 2008)。

233

234 経口投与

- 235 ・Sprague Dawley から派生した系統の雄性ラット (投与群 6 匹、対照群 5 匹) に、388 mg/kg
236 体重/日のジフェニルアミンを 21 日間強制経口投与した。投与群では、腎乳頭の 20% に
237 壊死が認められ、腎重量増加及び尿濃縮能力の低下を示した (EU RAR 2008)。
- 238 ・Fischer ラット (1 群あたり雌雄各 6 匹) に、0、111、333、1,000 mg/kg 体重/日のジフ
239 ェニルアミンを 28 日間強制経口投与した。また、別に設けた 0 及び 1,000 mg/kg 群は

240 投与終了後 2 週間観察した。雌雄共に 1,000 mg/kg 群で、体重増加抑制、肝臓、脾臓、
241 腎臓重量の増加及び貧血がみられ、病理組織学的な検査により、前胃粘膜過形成、腎臓
242 の皮髄境界部における尿細管の拡張、変性及び骨髄過形成がみられた。333 mg/kg 群の
243 数匹には、脾臓、肝臓、腎臓重量の軽微な増加と尿細管の軽微な変性が確認された。病
244 理組織学的な傷害と貧血は投与終了 14 日後に回復した。111 mg/kg 群で毒性影響が見ら
245 れなかったため、この試験条件における NOAEL は 111 mg/kg 体重/日とされた (EU RAR
246 2008、NITE 2008、環境省 2006)。

- 247 ・ 上記の (エ) 反復投与毒性試験で、生殖腺の重量に加えて、前立腺、子宮及び膣の病理
248 組織学的評価が行われた。左右精巣の絶対重量は減少した。相対重量は、左精巣で減少
249 したが右精巣では減少しなかった。333 及び 111 mg/kg 群では、精巣の絶対及び相対重
250 量に影響は認められなかった。雌の生殖腺については報告されていない。病理組織学的
251 評価からは、投与に関連した影響を示す所見は何も得られなかった (EU RAR 2008)。
- 252 ・ F344/DuCrIj ラットを対象とする 13 週間経口 (混餌) 試験において、被験物質投与
253 群 5 群と対照群 1 群の計 6 群の構成で、雌雄各群 10 匹とし、投与濃度は、雌雄とも 0、
254 256、640、1600、4000 及び 10000 ppm (重量比 w/w) (公比 2.5) とした。ジフェニ
255 ルアミンの 13 週間混餌投与により血液系 (貧血)、肝臓、腎臓への影響が示唆された。
256 その中で、最も低い用量まで認められた毒性変化は血液系 (貧血) への影響であり、雄
257 では赤血球数とヘモグロビン濃度の低値、並びに MCV、網赤血球比及びメトヘモグロビ
258 ン濃度の高値が 640 ppm 群まで、雌では赤血球数、ヘモグロビン濃度及びヘマトクリ
259 ット値の低値、並びに MCV、MCH、網赤血球比、メトヘモグロビン濃度及び総ビリル
260 ビンの高値が最低投与濃度の 256 ppm まで認められた。従って、本試験における無毒
261 性量 (NOAEL) は、血液系 (貧血) への影響をエンドポイントとして、雄は 256 ppm
262 (平均 15mg/kg body weight per day) であると考えられた。雌は無毒性量 (NOAEL)
263 は求められず、最低毒性量 (LOAEL) が 256 ppm (平均 17 mg/kg body weight per day)
264 であると考えられた (日本バイオアッセイ研究センター 2008a)。
- 265 ・ 雄性ラットに 2.5% の濃度でジフェニルアミン (1,250 mg/kg 体重/日相当) を含む飼料
266 を 19 週間にわたって与えた。最初に検出された微細形態学的な腎病変は、近位尿細管上
267 皮細胞における電子密度の高い物質の出現であり、これらの細胞は変性した。同様の現
268 象は、ネフロン of 遠位部でも認められ、細胞の密集化、ミトコンドリアの膨張及び細胞
269 剥離を伴っていた。その結果、いくつかの尿細管で閉塞がおり、尿管拡張、嚢胞の形
270 成により隣接する実質への圧迫が引き起こされた (EU RAR 2008)。
- 271 ・ 雌性 Albino ラット (1 群 6 匹) に、0、0.025%、0.1%、0.5%、1.0%、1.5% (12.5、
272 50、250、500、750 mg/kg 体重/日に相当) のジフェニルアミン混餌飼料を 226 日間与
273 えた。0.5% 以上の群では主な毒性影響として、体重増加抑制、限局性の尿細管拡張、遠
274 位尿細管と集合管における嚢胞形成が認められた (EU RAR 2008)。
- 275 ・ 雄性 SD ラットに、1.0% (500 mg/kg 体重/日に相当) のジフェニルアミン混餌飼料を最
276 長 76 週間与えた。2~6 週間後、希釈尿を伴う多尿症が生じた。最初の組織学的変化は
277 5 週間後に現れ、遠位尿細管や集合管細胞の増殖巣がみられた。髄質尿細管の一部巢領
278 域はいくつかの細胞が重なり合って肥厚していた。10 週目までには集合管は巢状壊死を
279 伴う嚢胞性拡張がみられ、尿細管内腔には円柱状の物質が増加していた (EU RAR 2008)。

280 ・ 1 群当たり雌雄各 20 匹の Albino ラットにジフェニルアミンを 0.001 %、0.01 %、0.1%、
281 0.5%、1% (0.5、5、50、250、500 mg/kg 体重/日に相当) の濃度になるように調整さ
282 れた混餌飼料を 2 年間与えたところ、0.5%群と 1%群の雌雄ラットにおいて緩やかな体
283 重増加抑制を示した。これは、餌に対する嗜好性が低く摂餌量が少なかったためと考え
284 られた。血液検査の結果、1%群にはヘモグロビンの減少と正赤芽球の増加を伴う貧血が
285 みられた。0.1%群では、遠位尿細管と集合管の嚢胞性拡張がみられ、それに伴い、0.1%
286 群と 0.5%群の群で間質性の炎症がみられた。近位尿細管への影響は極めて稀であり、糸
287 球体には変化が全く生じなかった。0.01%群 (5 mg/kg 体重/日、NOAEL) 以下では全
288 く変化はみられなかった (EU RAR 2008, NITE 2008)。

289 ・ 雌性 SD ラットに 2.5%のジフェニルアミン混餌飼料を 3~6 週間与えたところ、腎臓の
290 約 10%に、肉眼で観察できる嚢胞がみられた。しかしながら全ての腎臓で形態学的な変
291 化を示しており、ほとんどの腎臓では組織学的に集合管の拡張がみられた。さらに、2
292 週間以内に腎臓の尿濃縮能が減少した (EU RAR 2008)。

293 ・ SD ラット (1 群雌雄各 10 匹) にジフェニルアミンを 0、150、1,500、7,500、15,000 ppm
294 の濃度になるように調整した混餌飼料を、90 日間与えた。雄では 0、9.6、96、550、1,200
295 mg/kg 体重/日、雌では 0、12、110、650、1,300 mg/kg/日に相当する。尿の暗色化は、
296 1,500 ppm 群の 1 匹の雌で認められはじめ、15,000 ppm 群では 100 %のラットで認め
297 られ、用量依存的にその頻度は増加した。血液学的検査では、赤血球数とヘモグロビン
298 値の減少が 7,500 ppm 以上の群にみられた。ヘマトクリット値は、1,500 ppm 以上の群
299 の雌で減少した。コレステロール濃度は 1,500 ppm 以上の群の雌で増加した。雄におい
300 てはアルカリホスファターゼ活性、アルブミン量及びアルブミン：グロブリン比、雌に
301 においてはグルコース、アルブミン量とアルブミン：グロブリン比が 7,500 ppm 以上の群
302 で軽度な上昇がみられた。肝臓と脾臓の絶対及び相対重量、腎臓と生殖腺の相対重量が
303 雄の 7,500 ppm 以上の群で増加した。雌では肝臓の絶対重量が 1,500 ppm 以上の群で増
304 加した。7,500 ppm と 15,000 ppm 群の雌雄ラットの腎臓は暗色化しており、15,000 ppm
305 群の雌のおよそ 60%で肝臓の暗色化又は及び拡張が認められた。7,500 ppm と 15,000
306 ppm 群の雌雄ラットでは脾臓が鬱血していた。病理組織学的検査では、7,500 ppm 以上
307 の群の雌雄ラットにおいて、肝臓の造血亢進や色素沈着、脾臓の造血亢進やヘモジデリン
308 沈着及び鬱血像、腎臓の色素沈着の増加が認められた。また、1,500 ppm 群のすべて
309 の雌の脾臓には、極軽微から軽微な造血亢進とヘモジデリン沈着が認められた。毒性に
310 関わる臨床症状、臨床化学的变化、臓器重量の変化及び病理組織学的所見に基づくと
311 NOAEL は 150 ppm であり、これは 12 mg/kg 体重/日に相当する (EU RAR 2008) (NITE
312 2008)。

313 ・ ラット (系統不明) (1 群雌雄各 10 匹) にジフェニルアミン 0.01、0.03、0.1、0.3 及び
314 1%の混餌飼料 (5、15、50、150 及び 500 mg/kg 体重/日に相当) を 90 日間与えた。0.01
315 及び 0.03%投与の雄ラットには有害な所見はみられなかった。雌では、肝臓重量が全て
316 の群で増加し、脾臓重量は 0.03%以上の群で増加した。雄の肝臓重量は 0.1%以上の群
317 で増加した。0.3%群では、肝臓、腎臓及び脾臓は色が褐変し、鬱血がみられ、脾臓重量
318 が増加した。50 日後、1.0%群では、雌雄で深刻な影響がみられた (衰弱、成育遅延、
319 肝臓及び脾臓の重量増加、肝臓における小葉中心性壊死、腎炎の増加、脾臓鬱血)。さら

320 に、1%群の雄ラットにおいて、上気道感染症による死亡率が増加した。雌の血液学的検
321 査値には対照群と比べて異常がみられた。雌ラットの肝重量増加により、LOAELは
322 0.01% (5 mg/kg 体重/日に相当) とされた。雌におけるこの重量変化は非常に軽微なも
323 のであり、機能的な悪影響を伴わないため、この LOAEL はジフェニルアミンのリスク
324 判定には考慮に入れない (EU RAR 2008)。

325 ・ラット (系統不明) にジフェニルアミン 0、10、100、1,130 mg/kg 体重/日を 30 日間経
326 口投与した結果、1,130 mg/kg 群では体重増加の顕著な抑制を認め、ほとんどの脾臓が
327 暗紫色で顆粒状凹凸を示したが、100 mg/kg 群の摂餌量や体重は増加した (環境省 2006)。

328 ・SD ラット (1 群雌雄各 60 匹) に、雄には 0、200、750、3,750、7,500 ppm (0、8.1、
329 29、150、300 mg/kg 体重/日に相当)、雌には 0、150、500、2,500、5,000 ppm (0、
330 7.5、25、140、290 mg/kg 体重/日に相当) の濃度になるように調整したジフェニルアミ
331 ン (純度 99%超) を 2 年間混餌投与した。各群、雌雄 10 匹のラットは 1 年目に途中剖
332 検した。投与に関連した死亡はなかったが、対照群と低用量群での死亡率が増加したた
333 め、観察は 102 週で終了となった。雌雄の高用量側 2 群の死亡率は対照群より低かった。
334 体重や体重増加量は高用量側 2 群で低かった。最初の 1 週を除き摂餌量に減少はみられ
335 なかった。赤血球数及びヘモグロビン量は、3,750 ppm 以上の群の雄で、26 週の時点及
336 び試験終了時に減少した。雌では、赤血球数、ヘモグロビン含量及びヘマトクリット値
337 が、2,500 ppm 群以上の群で投与期間のほぼ全体を通じて、また試験終了時点で減少し
338 た。赤血球数、ヘモグロビン量及びヘマトクリット値の減少は、750 ppm 群の雄及び 500
339 ppm 群の雌でも認められたが、散発的な減少であった。赤血球容積及び赤血球ヘモグロ
340 ビン量は、750 ppm 以上の群の雄及び 2,500 ppm 以上の群の雌で増加した。脾臓の絶対
341 及び相対重量は、2,500 ppm 以上の群の雌で途中剖検時と試験終了時に増加した。脾臓
342 重量の増加は 7,500 ppm 群の雄でもみられた。肝臓の相対重量は試験終了時の 5,000
343 ppm 群の雌及び途中剖検時の 2,500 ppm 以上の群の雌で増加したが、雄では肝臓重量の
344 増加はみられなかった。750 ppm 以上の群の雄と 500 ppm 群の雌で剖検時に脾臓の暗
345 色化や肥大化が認められた。顕微鏡観察では、腎臓の色素沈着が用量依存的に増加し、
346 7,500 ppm 群の雄では 44/50 例、雌では 44/52 例に達していた。肝臓の髓外造血や色素
347 沈着は用量依存的に増加し、7,500 ppm 群の雄では各々 21/50 例と 27/50 例、5,000 ppm
348 群の雌では 41/52 例と 45/52 例であった。赤芽球過形成は 3,750 ppm 以上の群の雄、
349 2,500ppm 以上の群の雌でみられた。脾臓の鬱血は用量依存的に増加し、7,500 ppm 群
350 の雄では 50/50 例、5,000 ppm 群の雌では 47/52 例に達していた。NOAEL は、血液学
351 的パラメータや脾臓、腎臓及び肝臓の病理組織学的所見により 150~200 ppm であり、
352 7.5 mg/kg 体重/日に相当する (EU RAR 2008) (NITE 2008) (環境省 2006)。

353 ・ F344/DuCrIj ラットを用いた混餌経口投与による 2 年間 (104 週間) の試験に
354 において、被験物質投与群 3 群と対照群 1 群の計 4 群の構成で、雌雄各群とも 50 匹
355 とし、投与濃度は、雌雄とも 0 (対照群)、250、1000 及び 4000 ppm (重量比 w/w)
356 とした。ジフェニルアミンの 2 年間の混餌経口投与により、雌雄とも血液/造血系、
357 脾臓、肝臓及び腎臓に対する影響が認められた。その中で、最も低い用量まで認めら
358 れた毒性変化は、雄では血液/造血系への影響として、メトヘモグロビンの高値と
359 脾臓重量の高値が、肝臓への影響として、肝臓重量の高値と AST、LDH 等の酵素

360 活性の高値が 1000 ppm 群まで認められた。雌ではメトヘモグロビンの高値が最低
361 投与濃度の 250 ppm 群まで認められた。従って、本試験における無毒性量
362 (NOAEL) は、雄では 250 ppm (12 mg/kg 体重/日) であり、雌では NOAEL は
363 求められず、最低毒性量 (LOAEL) が 250 ppm (15 mg/kg 体重/日) であると考
364 えられた (日本バイオアッセイ研究センター 2011a)。

- 365 ・ 合計 1,200 匹の CD-1 マウス (1 群匹数不明) に 0 ppm、50 ppm、100 ppm、250 ppm
366 (7.5、15、37.5 mg/kg 体重/日に相当) のジフェニルアミンを含む飼料を最長 92
367 週間、あるいは同系統のマウス (1 群匹数不明) に、0 ppm、5 ppm、10 ppm、50 ppm、
368 100 ppm、250 ppm、1,000 ppm (0.75、1.5、7.5、15、37.5、150 mg/kg 体重/日
369 に相当) のジフェニルアミンを含む飼料を 12 週間摂食させた。92 週間投与では、
370 体重、臨床症状、生存率、自然疾患の発生、血液学的数値 (メトヘモグロビン量
371 を含む) 及び病理組織学的に影響はみられなかった。唯一の影響は、250 ppm (37.5
372 mg/kg) 群で、赤血球のハインツ小体が出現したことであった。ハインツ小体は、
373 回復期間の 5 週間後でもヒストリカルコントロール値の範囲を上回っていた。12 週
374 間投与では、50 ppm 以上の群でハインツ小体の出現が認められた。ハインツ小体
375 の出現は 1~2 週間で始まった。1,000 ppm (150 mg/kg) 群では、赤血球における
376 グルコース-6-リン酸脱水素酵素と 6-ホスホグルコン酸の一時的な減少が観察
377 された。この試験は要約しか得られていないが、NOAEL は 1.5 mg/kg 体重/日と導
378 き出された (EU RAR 2008)。
- 379 ・ CD-1 マウス (1 群雌雄各 15 匹) に、ジフェニルアミンの混餌飼料を 90 日間与えた。ジ
380 フェニルアミンの濃度は 0、10、520、2,600 及び 5,200 ppm であり、これらは雄では、
381 1.7、94、440 及び 920 mg/kg 体重/日に相当し、雌では 2.1、110、560 及び 1,100 mg/kg
382 体重/日に相当する。2,600 ppm 以上の群で赤血球数とヘマトクリット値は減少、赤血球
383 ヘモグロビン量、赤血球容積、ヘモグロビン濃度は増加した。赤血球ヘモグロビン濃度
384 は、52 ppm 群の雄でも増加した。網状赤血球数は 5,200 ppm 群で増加した。雄では肝
385 臓と脾臓の絶対及び相対重量が 2,600 ppm 以上の群に、腎臓と心臓の相対重量は 5,200
386 ppm 群で増加した。雌では、脾臓の絶対及び相対重量が 2,600 ppm 以上の群に、肝臓の
387 絶対及び相対重量ならびに腎臓の相対重量は 5,200 ppm 群で増加した。剖検では、雌の
388 520 ppm 以上の群で脾臓の暗色化や肥大、2,600 ppm 以上の群で肝臓の暗色化、5,200
389 ppm 群で腎臓の暗色化が観察された。雄では、2,600 ppm 以上の群に脾臓と肝臓の暗色
390 化及び肥大が観察された。病理組織学的検査により、肝臓には雌雄の 2,600 ppm 以上の
391 群で色素沈着や軽微な造血亢進、脾臓には 520 ppm 以上の群でヘモジデリン沈着と鬱血
392 が認められ、2,600 ppm 以上の群の発生率は 14/15 例以上であった。脾臓の造血亢進の
393 程度は 520 ppm 以上の群で上昇していた。腎臓には、2,600 ppm 以上の群で色素沈着が
394 みられた。膀胱炎も観察され、発症率は 5,200 ppm 群の雄で 9/15 例、260 ppm 群の雌
395 で 2/15 例、520 ppm 群の雌では 8/14 例であった。骨髄の細胞密度が 2,600 ppm 以上の
396 群で上昇した。著者は、血液学的パラメータの変化と剖検での所見に基づいた NOAEL
397 は 10 ppm (1.7 mg/kg 体重/日に相当) とした (EU RAR 2008) (NITE 2008)。
- 398 ・ B6D2F1/Crlj マウスを用いた経口投与による 13 週間試験を実施した。1 群当たり
399 の動物数は雌雄各 10 匹とし、被験物質投与群 5 群と対照群 1 群の計 6 群構成で

400 行った。投与濃度は、雌雄とも 0、256、640、1600、4000 及び 10000 ppm (w/w)
401 とした。観察、検査として、一般状態の観察、体重及び摂餌量の測定、血液学的検
402 査、血液生化学的検査、尿検査、剖検、臓器重量測定及び病理組織学的検査を行っ
403 た。ジフェニルアミンの 13 週間混餌投与により血液系（貧血）、肝臓、腎臓への影
404 響が示めされた。その中で、最も低い用量まで認められた毒性変化は、血液系（貧
405 血）への影響であり、雄では赤血球数、ヘモグロビン濃度及びヘマトクリット値の
406 低値、メトヘモグロビン濃度の高値、並びに MCV や MCH の高値が最低投与濃度
407 の 256 ppm 群まで、雌でも赤血球数の低値、メトヘモグロビン濃度の高値、並び
408 に MCV と MCH の高値が最低投与濃度の 256 ppm 群まで認められた。従って、
409 本試験における無毒性量（NOAEL）は雌雄とも求められず、最低毒性量（LOAEL）
410 が 256 ppm（平均 雄：35 mg/kg body weight per day、雌：43 mg/kg body weight
411 per day）であると考えられた（日本バイオアッセイ研究センター 2008b）。

412 ・ CD-1 マウス（1 群雌雄各 60 匹）に、0、525、2,625、5,250 ppm（雄 0、73、370
413 及び 760 mg/kg 体重/日、雌 0、90、460 及び 940 mg/kg 体重/日に相当）のジフェ
414 ニルアミン（純度 99%超）を 78 週間混餌投与した。雌雄各 10 匹は 52 週目に剖検
415 した。2,625 ppm 以上の群の雄で陰茎突出発生率と 525 ppm 以上の群の雌雄で粗毛
416 の増加がみられた。死亡率は 2,625 ppm 以上の投与群で増加し、主な死亡原因は雄
417 では膀胱炎、雌ではアミロイド蓄積症であった。体重増加量は、雄では 5,250 ppm
418 群で減少、2,625 ppm 群で散発的な減少がみられ、雌では 5,250 ppm 群で試験開始
419 から 3 週間で減少、残りの期間は散発的な減少がみられた。摂餌量は 5,250 ppm 群
420 の雄で最初の 1 週間に減少がみられた。52 週剖検時の血液学的検査で、雄は 2,625
421 ppm 以上の群にヘマトクリット(Ht)と赤血球数(RBC)の減少、赤血球容積(MCV)、
422 赤血球ヘモグロビン濃度(MCHC)及び含量(MCH)の増加がみられ、雌は 525 ppm
423 以上の群に Ht の減少、2,625 ppm 以上の群に RBC の減少、MCHC と MCH の増
424 加、5,250 ppm 群に MCV の増加がみられた。78 週剖検時には 2,625 ppm 以上の群
425 の雌雄で Ht 及び RBC の増加、2,625 ppm 以上の群の雄で網状赤血球数、MCV、
426 MCHC 及び MCH の増加がみられた。52 週剖検時の肉眼観察では、2,625 ppm 以
427 上の群の雌雄で脾臓の暗色化、5,250 ppm 群で肝臓の暗色化と腎臓の白色化がみら
428 れ、78 週剖検時では、2,625 ppm 以上の群の雌雄で脾臓の暗色化と腫大及び肝臓の
429 暗色化がみられた。52 週剖検時の臓器重量は、雄では 2,625 ppm 以上の群の脾臓
430 と肝臓の絶対重量と 5,250 ppm 群の肝臓の相対重量が増加し、雌では 5,250 ppm 群
431 の脾臓と心臓の絶対及び相対重量が増加した。78 週剖検時では、雄では 2,625 ppm
432 以上の群の脾臓と肝臓の絶対及び相対重量、5,250 ppm 群の心臓の絶対及び相対重
433 量が増加し、雌では 2,625 ppm 以上の群の肝臓の相対重量、5,250 ppm 群の脾臓の
434 絶対重量及び心臓の絶対及び相対重量が増加した。病理組織学検査では、死亡ある
435 いは瀕死状態が確認された動物、あるいは 78 週目に剖検した 2,625 ppm 以上の群
436 の雌雄で、肝臓の髄外造血及び色素沈着が認められた。525 ppm 以上の群の雌雄に
437 は、脾臓の鬱血及びヘモジデリン沈着の増加がみられ、5,250 ppm 群の雄及び 2,625
438 ppm 以上の群の雌で色素沈着が認められた。5,250 ppm 群の雄では腎盂腎炎が認め
439 られた。脾臓の髄外造血がみられた動物数の増加に用量依存性はなかったが、重症

440 度スコアは、対照群ではきわめて軽微であったのに対し、525 ppm 群の雌雄では軽
441 微、5,250 ppm 群の雌雄では中程度ないしは重度であった。骨髄の細胞密度は 5,250
442 ppm 群では重度であった。膀胱炎と膀胱拡張症の発生率は、2,625 ppm 以上の群の
443 雌雄で増加がみられた。龟头包皮炎の発生率は用量に依存して増加した。5,250 ppm
444 群の雌で、甲状腺、副腎、腎臓、胃、小腸、卵巣及び子宮におけるアミロイド蓄積
445 症の発症率が増加した。NOAEL は 525 ppm (73 mg/kg 体重/日) であった (EU RAR
446 2008, NITE 2008)。

- 447 • B6D2F1/Crlj マウスを用いた混餌経口投与による 2 年間 (104 週間) の試験を実
448 施した。本試験は、被験物質投与群 3 群と対照群 1 群の計 4 群の構成で、雌雄各
449 群とも 50 匹とし、合計 400 匹を用いた。投与濃度は、雌雄とも 0 (対照群)、250、
450 1000 及び 4000 ppm (重量比 w/w) とした。ジフェニルアミンの 2 年間の混餌経
451 口投与により、雌雄とも血液/造血系、肝臓、泌尿器系及び肺への影響が認められ
452 た。その中で、最も低い用量まで認められた毒性変化は、血液/造血系への影響であ
453 り、雄ではヘマトクリット値の低値、総ビリルビンの高値、並びに、脾臓のヘモジ
454 デリン沈着の発生増加が最低投与濃度の 250 ppm 群まで、雌でも赤血球数、ヘモ
455 グロビン濃度及びヘマトクリット値の低値、脾臓の重量増加、並びに脾臓のヘモジ
456 デリン沈着の発生増加が最低投与濃度の 250 ppm 群まで認められた。従って、本
457 試験における無毒性量 (NOAEL) は雌雄とも求められず、最低毒性量 (LOAEL)
458 は 250 ppm (雄 : 29 mg/kg 体重/日、雌 : 36 mg/kg 体重/日) であると考えられた
459 (日本バイオアッセイ研究センター 2011b)。
- 460 • ビーグル犬 (1 群雌雄各 4 匹) にジフェニルアミン (純度 99%超) を 0、10、25 及
461 び 100 mg/kg 体重/日の用量で 52 週間にわたってゼラチンカプセルで与えた。ジフ
462 ェニルアミン投与に関連した臨床症状は試験終了時には見られなかった。25 mg/kg
463 群の 1 匹と 100 mg/kg 群の 2 匹に被毛の緑色化が見られた。死亡例やジフェニルア
464 ミン投与に関連した体重、摂餌量、眼科的パラメータは見られなかった。血液学的
465 検査により赤血球数 (対照群と比較して 11%)、ヘモグロビン (9.3%)、ヘマトク
466 リット (8.7%) の軽微な減少が 100 mg/kg 群の雌でみられ、雄では 25 mg/kg 以上
467 の群に用量依存的に、13、26、39 及び 52 週目の時点で血小板数が増加した。総ビ
468 リルビン濃度は 25 mg/kg 以上の群の動物では試験期間中増加し、10 mg/kg 群では
469 26 週目の雌雄と 39 週目の雌にこの増加が見られた。コレステロール濃度は全期間
470 で増加したが、有意差が認められたのは 100 mg/kg 群の雄の 13 週目 (68%増) と、
471 100 mg/kg 群の雌の 39 週目 (37%増) のみであった。血中尿素窒素濃度は雌の 25
472 mg/kg 群 (16%減) と 100 mg/kg 群 (20%減) で 52 週目に減少が認められた。雄
473 では肝臓及び甲状腺の絶対及び相対重量が増加し、100 mg/kg 群の雄の絶対肝臓重
474 量のみ統計学的有意差が認められた。雌の甲状腺の絶対及び相対重量は濃度依存
475 的に減少したが、どの用量でも有意差はなかった。投与に関連する病理組織学的変
476 化は見られなかった。軽微な臨床化学的变化に基づき、毒性に関する NOAEL は 10
477 mg/kg 体重/日とされた (NITE 2008) (環境省 2006)。
- 478 • ビーグル犬 (1 群雌雄各 2 匹) にジフェニルアミンを 0、10、25、50 mg/kg 体重/日の用
479 量でゼラチンカプセルに入れて 90 日間投与した。死亡例はなく、投与に関連したパラメ

480 ータの変化も認められなかった。アルブミン量、雄におけるアルブミン:グロブリン比、
481 雌におけるビリルビン量などいくつかの臨床化学的パラメータで増加が見られたが、こ
482 れらは偶発的なものであると思われた。したがって、最も高い設定用量の 50 mg/kg 体
483 重/日が NOAEL とされた (EU RAR 2008) (NITE 2008)。

484 ・ビーグル犬 (1 群雌雄各 2 匹) に 0.01% (2.5 mg/kg 体重/日に相当)、0.1% (25 mg/kg
485 体重/日に相当)、1.0% (250 mg/kg 体重/日に相当) のジフェニルアミン混餌飼料を 2 年
486 間にわたって経口投与した。1 年後、0.1% 及び 1.0% 群では体重増加の著しい抑制が認
487 められた。貧血症が濃度依存的にみられ、1.0% 群では著しく、0.1% 群では中程度であ
488 った。2 年後には、1.0% 群において、赤血球の低浸透圧に対する抵抗性が中程度の低下
489 を示した。618 から 627 日目にかけて行われたスルホプロモフタレイン試験による肝機
490 能検査では、1.0% 群に中程度の肝障害が示された。NOAEL は 25 mg/kg 体重/日の用量
491 で認められたヘモグロビン量や赤血球数の軽微な減少に基づき、2.5 mg/kg 体重/日とな
492 る。動物には、肝小葉周辺帯脂肪変性と脂肪含量の増加を伴った肝臓重量の増加、脾臓
493 や腎臓及び脊髄における軽度のヘモジデリン沈着、及び腎臓重量の軽微な増加も認めら
494 れた (EU RAR 2008) (NITE 2008) (AGCIH 2001)。

495

496 経皮投与

497 ・SD ラットに 0、500、2,000mg/kg 体重のジフェニルアミンを 5 日/週、90 日間、経皮投
498 与した。ラットは個別飼育され、試験物質を経口的に摂取しないようにカラーが取り付
499 けられた。全身毒性の徴候は見られず、投与は体重に影響を及ぼさなかった。投与群で
500 は血清生化学と血液学的パラメータに変化がみられたが、ヒストリカルコントロールデ
501 ータの範囲を逸脱するものではなかった。90 日間にわたるジフェニルアミン経皮投与に
502 よる全身毒性の NOAEL である 500 mg/kg 体重/日は、雄における腎臓の相対重量の増
503 加が 2,000 mg/kg 群で見られたことに基づいている。また、全ての投与群で投与部位の
504 皮膚過形成が生じたため、局所的影響の NOAEL は得られず、90 日間投与による皮膚で
505 の局所的影響に関する LOAEL は 500 mg/kg 体重/日である (EU RAR 2008)。

506 ・NZW ウサギ (1 群雌雄各 5 匹) の体表の約 10% に相当する剃毛した皮膚に、蒸留水に
507 溶解したジフェニルアミンを 0、100、500、1,000 mg/kg 体重/日の用量で 1 日 6 時間、
508 21 日間連続反復塗布した。死亡例はなく、ジフェニルアミン投与による臨床症状、体重、
509 摂餌量、血液学的評価項目に影響は認められなかった。唯一見られたジフェニルアミン
510 投与による臨床化学的な影響は、血中のナトリウムとカリウム濃度であり、投与をうけ
511 た全 3 群の雌でナトリウム値が低下し、500 mg/kg 及び 1,000 mg/kg 群の雌と、1,000
512 mg/kg 群の雄ではカリウム値が減少していた。肉眼的な剖検では、雌雄のウサギの胃に、
513 暗赤色の病巣が認められ、高用量になるほど増加し、発症率は 500 mg/kg 群の雄で 1/5
514 例、1,000 mg/kg 群の雄で 4/5 例、500 mg/kg 群の雌で 1/5 例、1,000 mg/kg 群の雌で
515 2/5 例であった。暗赤色の病巣は対照群や 100 mg/kg 群のウサギの胃ではみられなかつ
516 た。雌雄のウサギの胃における暗赤色病巣の出現に基づき、全身毒性の NOAEL は 100
517 mg/kg 体重/日となった (EU RAR 2008) (NITE 2008)。

518

519 オ 生殖毒性

520 吸入ばく露

521 ・ 調査した範囲内では、報告はない。

522

523 経口投与/経皮投与/その他の経路等

524 ・ SD ラット (1 群雌雄各 28 匹) に、0、500、1,500、5,000 ppm (F0 雄ラットは 0、40、
525 115、399 mg/kg 体重/日、F0 雌ラットは 0、46、131、448 mg/kg 体重/日に相当) のジ
526 フェニルアミン (純度 99.8%) を交配前 70 日間混餌投与した 2 世代生殖毒性試験が実
527 施された。臨床症状 (雌雄における青みがかったケージ内の漏液と青みがかった被毛、
528 主に雌で乳腺の膨張と触診可能なほどの外側・腹側の腫瘤) が 5,000 ppm 群でみられた。
529 体重増加の抑制が 5,000 ppm 群では F0 雌雄及び F1 雌雄に、1,500 ppm 群では F0 雌雄
530 及び F1 雌にみられた。摂餌量も 1,500 ppm 以上の群で減少した。腎臓、脾臓及び肝臓
531 重量の増加が雄では 5,000 ppm 群、雌では 1,500 ppm 以上の群にみられた。雌雄の全投
532 与群には肉眼的観察で脾臓の腫大と黒紫色化が認められ、顕微鏡学的観察では近位尿管
533 細管における褐色色素沈着、肝細胞肥大、肝臓のクッパー細胞における褐色色素沈着、
534 脾臓の鬱血とヘモジデリン沈着が認められた。以上の結果から、F0 の全身毒性の
535 NOAEL は 500 ppm (雄では 40 mg/kg 体重/日、雌では 46 mg/kg 体重/日に相当) 未満、
536 LOAEL は 500 ppm と同等かそれ未満とした。体重の低下が 5,000 ppm 群の F1 児動物
537 では授乳中期間を通して、5,000 ppm 群の F2 児動物では授乳 4~12 日に、ないしは 21
538 日において、1,500 ppm 群の F2 児動物では授乳 14 日及び 21 日に認められたことから、
539 発生毒性の NOAEL は 500 ppm (母動物で 46 mg/kg 体重/日に相当) とされた。また、
540 5,000 ppm 群では両世代における出生児数の減少 (F2 の出産において有意) が認められ、
541 生殖毒性に関する NOAEL は 1,500 ppm (母動物で 131 mg/kg 体重/日に相当) とされ
542 た (EU RAR 2008, NITE 2008)。

543 ・ Albino ラット (Slonaker-Addis 系) にジフェニルアミンの混餌飼料を 2 年間投与した慢
544 性毒性試験において、動物を追加してジフェニルアミンの生殖能力に与える影響に関す
545 る試験を実施した。ラット (1 群雌 12 匹、雄 3 匹) に、0.0、0.1、0.25、0.50% のジフ
546 フェニルアミン (最低純度 99.9%、摂餌量より、50、125、250 mg/kg 体重/日に相当) を
547 混ぜた市販実験動物用飼料を 5 週齢時から与えた。ラットは 100 日齢から 3 週間、交配
548 期間を設けた (1 匹の雄に対し 4 匹の雌)。最初の交配により産まれた全ての児動物の離
549 乳後に再び交配した。さらに、最初の交配で生まれた児動物を交配し、2 世代目を得た。
550 この試験が行われている期間中の、親動物の臨床症状、体重及び摂餌量のデータは得ら
551 れていない。F0 世代 (1 回目及び 2 回目の交配) 及び F1 世代において各々対照群と比
552 較して、どの投与群でも出生児数や児動物の出生後死亡率に関して何ら影響は認められ
553 なかった。全体的にみて最も一貫した所見は、0.50% 群における一腹児数の減少、授乳
554 期間における体重増加の抑制がみられたことである。1 回目の交配で得られた児動物の
555 離乳時体重は、0.50% 群では対照群と比較して低値であった。2 回目の交配で得られた
556 児動物の離乳時体重は、0.50% 群では対照群と比較して有意差はなかったが、0.1% 群に
557 比べて低値であった。F2 児動物の体重は 0.50% 群で減少した。児動物の体重は母動物
558 の妊娠中と授乳中の不十分な摂餌量に関連している可能性が示唆されている。この試験
559 は、限られた情報しかなく、標準的な 2 世代試験の要件を満たしていないが、リスクの

560 総合評価の面では 0.25% (摂餌量、約 125 mg/kg 体重/日に相当) という NOAEL が導
561 き出されると考えられる。これは、最高飼料中濃度群で観察された、一腹児数低下と出
562 生後生育抑制という所見に基づくものである (EU RAR 2008)。

563 ・雌の SD ラット (1 群 25 匹) に 0、10、50、100 mg/kg 体重/日ジフェニルアミン (純度
564 99.9%、コーン油に溶解) を妊娠 6 日~15 日まで強制経口投与し、妊娠 20 日に帝王切
565 開した。試験期間中、死亡した動物はいなかった。100 mg/kg 群で母動物の脾臓重量の
566 増加と脾臓の腫大と黒紫色化が認められた。母動物における毒性に関連する NOAEL は
567 50 mg/kg 体重/日であり、LOAEL は 100 mg/kg 体重/日であった。発生毒性はどの投与
568 用量でもみられなかったことから、発生毒性の NOAEL は、試験の最大用量である 100
569 mg/kg 体重/日以上用量とされた (EU RAR 2008, 環境省 2006)。

570 ・妊娠した雌のラット (系統不明) に 0、2.5% のジフェニルアミンを含む飼料を、妊娠 14
571 ~20 日に混餌投与し、妊娠 20 日目に帝王切開した。その結果、胎児に腎臓集合管のう
572 胞性拡張、近位尿管変性がみられた (NITE 2008)。

573 ・NZW ウサギ (1 群 16~18 匹) に、0、33、100、300 mg/kg 体重/日のジフェニルアミ
574 ン (純度 99.9%) の 1%メチルセルロース懸濁液を、妊娠 7~19 日まで強制経口投与し
575 した。妊娠 29 日に帝王切開した。尿の緑色への変色は全投与群でみられたが、特に
576 100mg/kg 以上の群で顕著であった。300 mg/kg 群では、摂餌量が減少し、投与開始時
577 より体重の軽微な低下が見られ、その後、体重は対照群より低いままであった。33 及び
578 100 mg/kg 群ではこのような影響はみられなかった。投与に関連すると考えられる毒性
579 徴候や死亡例はみられなかった。妊娠率は投与による影響を受けなかった。試験終了時
580 の剖検では、肉眼的観察による所見はなかった。一腹児数、一腹重量、着床前と後の胚
581 損失及び胎児重量はジフェニルアミンによる影響を受けなかった。投与に関連した奇形
582 や異常も観察されなかった。内臓や骨格異常の発生率は、300 mg/kg 群でも影響は受け
583 なかった。この試験では、最高用量で摂餌量の減少と体重増加量の減少がみられたこと
584 に基づき、母体毒性に関する NOAEL は 100 mg/kg 体重/日と判断され、発生への影響
585 は見られなかったことから、発生毒性の NOAEL は 300 mg/kg 体重/日以上であると判
586 断された (EU RAR 2008) (NITE 2008) (環境省 2006)。

587

588 カ 遺伝毒性

589 ・ *in vitro* で、ジフェニルアミンはネズミチフス菌を用いた復帰突然変異試験で S9mix 存
590 在の有無に関わらず陰性であった。大腸菌を用いた DNA 損傷試験・DNA 修復試験、SOS
591 クロモ試験、酵母 (*Saccharomyces cerevisiae*) D5 を用いた遺伝子組換え試験はいずれ
592 も陰性であった。マウスリンフォーマ L5178Y Tk⁺を用いた遺伝子突然変異試験では、
593 S9mix 存在下で弱い陽性がみられたが、S9mix 非存在下では陰性で、大小のコロニーの
594 分布は同等であると報告された。また、別の S9mix 存在下の試験の結果は陰性であった。
595 ラット肝細胞の初代培養で不定期 DNA 合成試験は陰性であった。ヒトの培養リンパ球
596 を用いた姉妹染色分体交換試験は S9mix 存在の有無にかかわらず陰性であった。チャイ
597 ニーズハムスター肺線維芽細胞 (CHL/IU 細胞) を用いた染色体異常試験では、構造異
598 常について、6 時間処理の S9mix 非存在下で陰性、S9mix 存在下で陽性、S9mix 非存在
599 下の 24 及び 48 時間処理で陽性を示した (EU RAR 2008) (厚労省)。

- 600 • ジフェニルアミンを経口投与した雄 NMRI マウスとネズミチフス菌 TA1950 株を用いた
601 宿主経由試験は陰性であった (EU RAR 2008)。
- 602 • *in vivo* ではジフェニルアミンを腹腔内投与したマウス骨髄細胞を用いた姉妹染色分体交
603 換試験、ジフェニルアミンを経口投与した ICR マウス骨髄細胞を用いた小核試験は陰性
604 であった (EU RAR 2008)。
605

試験方法	使用細胞種・動物種・条件	結果		
<i>in vitro</i>	復帰突然変異試験	ネズミチフス菌TA98、TA100、 TA1535、TA1537、TA1538 (-S9mix: 6.67~100 µg/plate、 +S9mix: 10.0~100 µg/plate)	-	
		ネズミチフス菌TA98、TA100、 TA1535、TA1537、TA1538 (±S9mix) (0.1~500 µg/plate)	-	
	DNA修復試験	大腸菌W3110/ <i>polA</i> ⁺ 及び P3478/ <i>polA</i> ⁻	-	
	SOSクロモ試験	大腸菌PQ37	-	
	遺伝子組換え試験	<i>S. cerevisiae</i> D5	-	
	遺伝子突然変異試験	マウスリンフォーマL5178Y <i>Tk</i> ^{+/+} (±S9mix) (5~80 µg/mL)	-S9mix +S9mix	- (+)
		マウスリンフォーマL5178Y <i>Tk</i> ^{+/+} (+S9mix) (最高用量 0.2849 mmol/l: 48.2 µg/mlに相当)		-
	不定期DNA合成試験	肝細胞・ラット (100 nmol/mL: 16.9 µg/mlに相当)	-	
	姉妹染色分体交換試験	ヒトリンパ球 (±S9mix) (最高用量 3.5 × 10 ⁻⁵ mol/l: 60 µg/mlに相当) 4 時間	-	
染色体異常	CHL/IU細胞 短時間処理 (-S9mix: 0.02~0.10 mg/mL)、 (+S9mix: 0.06~0.14 mg/mL)	- (構造異常) + (構造異常)		
	連続処理 24時間 (-S9mix: 0.004~0.032 mg/mL) 48時間 (-S9mix: 0.016~0.048 mg/mL)	+ (構造異常) + (構造異常)		

	試験方法	使用細胞種・動物種・条件	結果
	宿主経路試験	マウス、0.245～0.490 mg/kg体重/日、経口投与 / ネズミチフス菌TA1950	—
<i>in vivo</i>	姉妹染色分体交換試験	マウス、1～100 mg/kg体重/日、腹腔内投与、骨髓細胞	—
	小核試験	ICRマウス、250、500、1,000 mg/kg体重（雄）、375、750、1500 mg/kg体重（雌）、単回強制経口投与、投与後24 – 72時間、骨髓細胞	—

— : 陰性 + : 陽性 (+) : 弱い陽性

606

607

608 キ 発がん性

609 吸入ばく露

610 ・ 調査した範囲内では、報告はない。

611

612 経口投与/経皮投与/その他の経路等

613 ・ SD ラット（1群雌雄各 60 匹）に、雄には 0、200、750、3,750、7,500 ppm（0、8.1、
614 29、150、300 mg/kg 体重/日に相当）、雌には 0、150、500、2,500、5,000 ppm（0、
615 7.5、25、140、290 mg/kg 体重/日に相当）の濃度になるように調整したジフェニルアミ
616 ン（純度 99%超）を 2 年間混餌投与した。投与による腫瘍発生の増加はみられなかった
617 （EU RAR 2008）。

618 ・ Albino ラット（1群雌雄各 20 匹）に、0、0.5、1.0%のジフェニルアミンを 2 年間混餌
619 投与した結果、ジフェニルアミンによる腫瘍の発生は見られなかった。著者らは、剖検
620 時に発症が観察された腫瘍（詳細な記述なし）は、ラットの加齢によるものであり、投
621 与とは無関係であると結論づけている（EU RAR 2008）（NITE 2008）（AGCIH 2001）。

622 ・ F344/DuCrIj ラットを用いた混餌経口投与による 2 年間（104 週間）の試験におい
623 て、被験物質投与群 3 群と対照群 1 群の計 4 群の構成で、雌雄各群とも 50 匹とし、
624 投与濃度は、雌雄とも 0（対照群）、250、1000 及び 4000 ppm（重量比 w/w）とした。
625 雄では脾臓の血管系腫瘍の発生の増加傾向、並びに脾臓と皮下組織を含む全臓器の血管
626 系腫瘍の発生増加、雌では子宮に腺がんの発生の増加傾向が認められた。これらの結果
627 から、ジフェニルアミンのラットに対するがん原性が示された。

付表 1 ジフェニルアミンのがん原性試験における主な腫瘍発生 (ラット 雄)

	投与濃度 (ppm)		0	250	1000	4000	Peto 検定	Cochran- Armitage 検定
	検査動物数		50	50	50	50		
良性 腫瘍	皮膚/付属器官	角化棘細胞腫	3	3	5	2		
	皮下組織	線維腫	2	11 **	3	2		
		血管腫	0	0	0	1		
		膵臓	島細胞腺腫	6	3	2	0 *	↓
	脾臓	血管腫	0	1	0	0		
	下垂体	腺腫	17	19	11	8 *	↓	
	甲状腺	C-細胞腺腫	11	10	12	13		
	副腎	褐色細胞腫	4	8	4	4		
	精巣	間細胞腫	37	40	46 *	46 *	↑	↑
悪性 腫瘍	皮下組織	線維肉腫	0	2	0	1		
		血管肉腫	0	0	0	1		
	脾臓	血管肉腫	0	0	0	3	↑↑	↑↑
		単核球性白血病	5	3	2	1		
脾臓	血管腫+血管肉腫	0	1	0	3	↑	↑	
皮下組織	線維腫+線維肉腫	2	13 **	3	3			
全臓器 ^{a)}	血管腫	0	1	0	1			
	血管肉腫	0	0	0	4	↑↑	↑↑	
	血管腫+血管肉腫 ^{b)}	0	1	0	5 *			

a : 皮下組織と脾臓を合わせた部位を全臓器と表現した。

b : 全臓器に対する血管腫+血管肉腫の Peto 検定と Cochran Armitage 検定は行っていない。

628

629

付表 2 ジフェニルアミンのがん原性試験における主な腫瘍発生 (ラット 雌)

	投与濃度 (ppm)		0	250	1000	4000	Peto 検定	Cochran- Armitage 検定
	検査動物数		50	50	50	50		
良性 腫瘍	下垂体	腺腫	11	13	12	16		
	甲状腺	C-細胞腺腫	7	9	7	5		
	子宮	子宮内膜間質性ポリープ	5	2	6	7		
	乳腺	腺腫	0	1	0	0		
		線維腺腫	8	11	7	2 *		↓
悪性 腫瘍	脾臓	血管肉腫	0	0	0	1		
		単核球性白血病	3	2	0	5	↑	
	下垂体	腺癌	2	1	4	0		
	子宮	腺癌	1	0	0	4	↑↑	↑↑
	子宮	腺腫+腺癌	1	1	0	4	↑	↑

* : $p \leq 0.05$ で有意

** : $p \leq 0.01$ で有意

(Fisher 検定)

↑ : $p \leq 0.05$ で有意増加

↑↑ : $p \leq 0.01$ で有意増加

(Peto, Cochran-Armitage 検定)

↓ : $p \leq 0.05$ で有意減少

↓↓ : $p \leq 0.01$ で有意減少

(Cochran-Armitage 検定)

630

631

雌雄の ICR マウス (1 群雌雄各 60 匹) に 0、520、2,600、5,200 ppm のジフェニルア

ミン (純度 99% 超) を 18 か月間混餌投与 (摂取量 : 雄 : 0、73、370 及び 760 mg/kg

体重/日に相当、雌 : 0、90、460 及び 940 mg/kg 体重/日に相当) した試験で、いずれの

用量でも、ジフェニルアミン投与による腫瘍の発生はみられなかった (NITE 2008) (環

境省 2006)。

8 週齢の NMRI マウスに、大豆油に溶解したジフェニルアミンを 300 mg/kg 体重/日の

用量で、1 回/週、18 か月間 (合計 78 回) 強制経口投与した。ジフェニルアミン投与群

638 は 125 匹のマウスを用い、対照群は 30 匹のマウスを用いた。期間途中の剖検を 25 週目
 639 及び 52 週目に行った。全観察期間は 126 週間にわたった。対照群と比較して、腫瘍発
 640 生頻度に変化はなかった (EU RAR 2008) (NITE 2008)。

- 641 • CD-1 マウス (1 群雌雄各 150 匹) に 0、0.005、0.01 及び 0.025% のジフェニルアミン
 642 混餌飼料を 92 週間投与した。腫瘍の出現時期や発症率に関して、ジフェニルアミンによ
 643 る影響は全く認められなかった (EU RAR 2008)。
- 644 • B6D2F1/Crlj マウスを用いた混餌経口投与による 2 年間 (104 週間) の試験を実施し
 645 た。本試験は、被験物質投与群 3 群と対照群 1 群の計 4 群の構成で、雌雄各群とも 50
 646 匹とし、合計 400 匹を用いた。投与濃度は、雌雄とも 0 (対照群)、250、1000 及び 4000
 647 ppm (重量比 w/w) とした。雄では脾臓、並びに脾臓及び肝臓等を含む全臓器に血管系
 648 腫瘍の発生増加が認められ、雄マウスに対するがん原性が示された。雌マウスでは腫瘍
 649 の発生増加は認められず、がん原性は示されなかった。

付表 1 ジフェニルアミンのがん原性試験における主な腫瘍発生 (マウス 雄)

投与濃度 (ppm)			0	250	1000	4000	Peto 検定	Cochran- Armitage 検定
検査動物数			50 ^{a)}	50	50	50		
良 性 腫 瘍	皮下組織	血管腫	0	0	1	0		
	肺	細気管支-肺胞上皮腺腫	5	4	7	4		
	骨髄	血管腫	0	0	0	1		
	脾臓	血管腫	1	0	6	2		
	肝臓	血管腫	2	2	5	3	↑	
		肝細胞腺腫	9	14	10	2 *		↓↓
		ハーダー腺	腺腫	4	2	1	1	
悪 性 腫 瘍	肺	細気管支-肺胞上皮癌	5	6	8	1		
	リンパ節	悪性リンパ腫	6	4	3	2		
	脾臓	血管肉腫	0	0	3	1		
	心臓	血管肉腫	0	1	0	0		
	肝臓	組織球性肉腫	5	1	1	1		
		肝細胞癌	7	15 *	5	2		↓↓
		血管肉腫	0	1	2	1		
	精巣上体	組織球性肉腫	1	1	3	1		
	脾臓	血管腫+血管肉腫	1	0	9 **	3		
	肝臓	血管腫+血管肉腫	2	3	7	4	↑	
	全臓器 ^{b)}	血管腫	3	2	10 *	6	↑	
		血管肉腫	0	1	4	1		
		血管腫+血管肉腫 ^{c)}	3	3	14 **	6		

a : 対照群のハーダー腺の検査動物数は 49

b : 脾臓、肝臓、皮下組織、骨髄及び心臓を合わせた部位を全臓器と表現した。

c : 全臓器に対する血管腫+血管肉腫の Peto 検定と Cochran Armitage 検定は行っていない。

650
651

付表 2 ジフェニルアミンのがん原性試験における主な腫瘍発生 (マウス 雌)

投与濃度 (ppm)		0	250	1000	4000	Peto 検定	Cochran- Armitage 検定
検査動物数		50	50	50	50		
良性 腫 瘍	肺	1	3	1	2		↓
	肝臓	4	4	3	0		
	下垂体	2	0	5	4		
	ハーダー腺	0	3	1	2		
悪性 腫 瘍	リンパ節	18	20	17	15		
	脾臓	0	3	1	0		
	肝臓	4	0	1	1		
	子宮	1	1	2	3		
	子宮	8	7	17 *	12		

*: $p \leq 0.05$ で有意 **: $p \leq 0.01$ で有意 (Fisher 検定)
 ↑: $p \leq 0.05$ で有意増加 ↑↑: $p \leq 0.01$ で有意増加 (Peto, Cochran-Armitage 検定)
 ↓: $p \leq 0.05$ で有意減少 ↓↓: $p \leq 0.01$ で有意減少 (Cochran-Armitage 検定)

652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679

- ・ ビーグル犬 (1 群雌雄各 2 匹) に 0.01、0.1、1% のジフェニルアミン混餌飼料を 24 か月間与えた。全ばく露レベルで腫瘍発生はみられず、全動物は試験終了時まで生存していた (EU RAR 2008)。
- ・ ラット (18 匹/群) にイニシエーターとして *N*-エチル-*N*-ヒドロキシエチルニトロサミンを 2 週間、1,000 ppm の濃度で混餌投与し、その後ジフェニルアミン 15,000 ppm を 22 週間、混餌投与した。22 週目以降 32 週目までは基礎飼料のみを投与し観察した。イニシエーター投与後ジフェニルアミンを投与した群では腎臓の腫瘍が 13/18 匹にみられたが、イニシエーターのみの投与群では 9/18 匹、ジフェニルアミンのみの投与群では腎臓の腫瘍は発生しなかった。以上から *N*-エチル-*N*-ヒドロキシエチルニトロサミンによる腎臓腫瘍発生に対して、ジフェニルアミンはプロモーター作用を示した (NITE 2008)。

ク 神経毒性

吸入ばく露

- ・ 調査した範囲内では、報告はない。

経口投与/経皮投与/その他の経路等

- ・ 調査した範囲内では、報告はない。

ケ その他の試験

- ・ 正常ラットの腎臓細胞に S9mix 非添加あるいは添加で、ジフェニルアミン (用量範囲 2.5~20.0 $\mu\text{g/mL}$) を 24 時間処置後、マウス肉腫ウイルス (MS; オンコルナウイルス由来) に感染させた結果、S9mix 非添加の場合、ジフェニルアミンは形質転換頻度を中程度に抑制したが、ラット S9mix 添加の場合、形質転換頻度が 2.5 倍に上昇した (EU RAR 2008)。
- ・ Syrian ハムスターの胚細胞の初代培養にジフェニルアミン (濃度範囲 6~100 $\mu\text{g/mL}$) を 2~8 時間処置後、サルアデノウイルス SA7 を感染させた結果、形質転換頻度は 25

680 μg/ml 以上のジフェニルアミンの前処置で上昇した (EU RAR 2008)。

681

682 (2) ヒトへの影響 (疫学調査及び事例)

683 ア 急性毒性

684 ・ ヒトにおけるジメチルアミンの急性毒性データはない (EU RAR 2008)。

685 ・ ジフェニルアミンのアルコール溶液の蒸気、一部はミストあるいはダストを吸入ばく露
686 とともに皮膚接触した職業ばく露で、膀胱への影響 (詳細不明)、頻脈、高血圧、湿疹が
687 生じ、食欲不振を示した (NITE 2008、環境省 2006)。

688

689 イ 刺激性及び腐食性

690 ・ ジフェニルアミンを吸入すると粘膜刺激性を示し、粉塵は眼を刺激する (NITE 2008)。

691 ・ ジフェニルアミンにばく露されたヒトに、アニリンにばく露された場合と同様の症状と
692 して皮膚、眼、粘膜への刺激性がみられ、メトヘモグロビン血症、泌尿器への影響がみ
693 られる (ACGIH 2001)。

694

695 ウ 感作性

696 ・ 電気回路ブレーカ工場に勤務し、金属、プラスチック及び潤滑剤を取り扱っていた 44
697 歳の女性の手の甲に小胞性及び滲出性皮膚炎を生じた。パッチテスト (1%濃度、溶媒の
698 記載なし) では、ジフェニルアミンは陽性反応を示したが、p-フェニレンジアミンは陽
699 性を示さなかった (EU RAR 2008)。

700 ・ 9つの市で合計 1,012 人の湿疹患者に対してパッチテスト (1%濃度、溶媒はワセリン)
701 が行われ、1つの市で 3名の陽性患者がいた。これらの患者はすべて p-フェニレンジ
702 アミンに対しても陽性反応を示したため、交差反応性によるものと考えられる。ばく露
703 は、0.1%のジフェニルアミンを含む香水原料の使用によると考えられている (EU RAR
704 2008)。

705 ・ ジフェニルアミンを含む生化学薬品の品質管理や分析に携わる 16名の男性グループで
706 皮膚炎の流行が起こった。そのうち 11名 (残りの 4名は他の物質で試験を行った) でメ
707 タノールに 1%となるように溶解したジフェニルアミンを用いたパッチテストが実施さ
708 れたが、1名も陽性反応を示さなかった (EU RAR 2008)。

709 ・ 30名のボランティアを対象に、マキシミゼーション試験 (1%濃度、溶媒はワセリン)
710 が実施されたが、1名も感作反応は認められなかった (EU RAR 2008) (環境省 2006)。

711 ・ 気道に対する感作性の情報はないが、ジフェニルアミンは使用し始めてから今日まで、
712 具体的な症例報告がなく、ヒトにおいて強力な気道感作性は示さないと考えられる (EU
713 RAR 2008)。

714

715 エ 反復ばく露毒性 (生殖毒性、遺伝毒性、発がん性、神経毒性は別途記載)

716 ・ 調査した範囲内では、報告はない。

717

718 オ 生殖毒性

719 ・ 調査した範囲内では、報告はない。

720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759

カ 遺伝毒性

- ・ 調査した範囲内では、報告はない。

キ 発がん性

- ・ 調査した範囲内では、報告はない。

発がんの定量的リスク評価

- ・ 調査した範囲内では、報告はない。

発がん性分類

IARC：情報なし (IARC) (2018/6/14 検索)

産衛学会：情報なし (産衛 2017)

EU CLP：情報なし (EU CLIP) (2015/9/72018/6/14 検索)

NTP 14th：情報なし (NTP 2014)

ACGIH：A4 (1996 年設定)

根拠：アルビノラット (Slonaker-Addisstrain of Sprague-Dawley) によるジフェニルアミン、0.5%～1.5%226 日間、2.5%1 年、10%～1.0%2 年の混餌による経口連続摂取で腫瘍の発生率はジフェニルアミンの取り扱いと関連していなかった。ビーグル犬に対する 2 年間のジフェニルアミンの 0.01%、0.1%、1.0% の混餌による経口投与において、腫瘍は発生しなかった。(ACGIH 2001)

DFG MAK：カテゴリー 3B (2012 年設定)

根拠：アニリンと同様に、赤血球毒性の二次反応を経て進行する作用の間接的な発がん機構が有効であり得るが、最終評価に適した十分なデータがないが、芳香族アミンとしての化学構造に起因する発がん作用の疑いにより、発がん性カテゴリー 3 B に分類される。(MAK2013)

ク 神経毒性

- ・ 調査した範囲内では、報告はない。

(3) 許容濃度の設定

ACGIH TLV：TWA 10 mg/m³ (1996 年設定)

根拠：ジフェニルアミンの職業ばく露許容濃度として TLV-TWA 10mg/m³ を勧告する。ジフェニルアミンを混餌投与したラット及びイヌで、腎臓、肝臓及び血液疾患への影響や皮膚や眼及び粘膜の刺激を最小化する値である。イヌやラットを用いたジフェニルアミンの 2 年間の混餌投与で発がん性は示さなかった。したがって、A4「発がん性物質として分類できない物質」の注記が適当である。Skin あるいは SEN 表示や TLV-STEL を勧告するに足る十分なデータはない (ACGIH 2001)。

日本産業衛生学会：設定なし (産衛 2017)

760 DFG MAK : 5 mg/m³ I (measured as the inhalable fraction of the aerosol), Peak-limitation
761 categories II(2), H (danger of percutaneous absorption) (2012 : 設定年) 、
762 Pregnancy Risk : Group C (2012 : 設定年) (MAK 2017)
763 根拠 : 反復投与からの NOAEL は、イヌで 2.5 mg ジフェニルアミン/kg 体重/日、ラッ
764 トで 8 mg ジフェニルアミン/kg 体重 day であり、MAK 値は低い値を用いる。こ
765 のため動物実験によるこの NOAEL の値は、委員会の計算手法 (the List of MAK
766 and BAT Values の section I 参照) を基に吸入暴露の MAK 値として 5 mg ジフ
767 ェニルアミン/m³ と算出される。
768 本物質は、全身作用 (毒性) があるので、ピークばくろ限度はカテゴリー II に分
769 類される。物質固有の毒物動態学データの不足により、ベースラインエクスカー
770 ションファクターの 2 が設定される。
771 経口による胎児毒性の NOAEL のデータ、ラット 46 mg /kg 体重/日、ウサギ 300
772 mg/kg 体重/日から、吸入の場合の NOAEL 濃度はラットとウサギでそれぞれ、
773 81、875 mg/m³ と導かれ、5 mg/m³ の MAK 値に対して、16 倍又は 175 倍とジ
774 フェニルアミンの妊娠リスクをグループ C に分類するのに十分離れた値となっ
775 ている。
776 皮膚の吸収 (Hauteresorption) に関する研究はないが、急性経皮毒性は低い。経
777 皮における生物学的利用能は約 28% である。数学的なモデルからは最悪のケー
778 スで 1 日当たり 137 mg と算出され、MAK 値を遵守した場合の吸入による摂取
779 (10 m³ の呼吸量で 1 日 50 mg) より高い。また、芳香族アミンは、一般的に経
780 皮吸収が高いと考えられている。よってジフェニルアミンは「H」と記される
781 (MAK 2012) 。

782
783 NIOSH REL : TWA 10 mg/m³ (NIOSH 2016)

784 OSHA PEL : 設定なし (OSHA 2018)

785

786 UK HSE : TWA 10 mg/m³ (UK HSE 2011)

787 OARS : 設定なし (OARS 2018)

788

789 引用文献

- (ACGIH 2001) American Conference of Governmental Industrial Hygienists (ACGIH) :
TLVs and BELs with 7th Edition Documentation , DIPHENYLAMINE
(2001)
- (ACGIH 2018) American Conference of Governmental Industrial Hygienists (ACGIH) :
TLVs and BELs (Booklet 2018)
- (EU CLP) Summary of Classification and Labelling
Harmonised classification - Annex VI of Regulation (EC) No 1272/2008
(CLP Regulation) : diphenylamine
- (EU RAR 2008) European Union Risk Assessment Report DIPHENYLAMINE

- (IARC) IARC Monographs on the Evaluation of Carcinogenic Risks to Humans. List of classifications, Volumes 1–113
(http://monographs.iarc.fr/ENG/Classification/latest_classif.php)
- (ICSC 2006) International Programme on Chemical Safety (WHO/IPCS) : ICSC カード(International Chemical Safety Cards) ICSC:0466
DIPHENYLAMINE (2006)
- (ICSC 2006: NIHS 2018) 国立医薬品食品衛生研究所 (NIHS) : 国際化学物質安全性カード (ICSC)、ICSC: 0466, ジフェニルアミン (2006) NIHS 翻訳 (2018)
- (MAK 2013) Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG): The MAK-Collection for Occupational Health and Safety, MAK Value Documentation for Diphenylamine (2013)
- (MAK 2017) Deutsche Forschungsgemeinschaft(DFG) : List of MAK and BAT Values (2017)
- (NIOSH) National Institute for Occupational Safety & Health (NIOSH) : NIOSH Pocket Guide to Chemical Hazards. Diphenylamine (Page last updated: April 11, 2016)
- (NITE 2008) 独立行政法人 製品評価技術基盤機構: 有害性評価書 Ver. 1.0 No.124 ジフェニルアミン (2008)
- (NITE CHRIP) 製品評価技術基盤機構 (NITE) 化学物質総合情報検索システム (CHRIP) (確認日 : 2018/08/03)
- (NTP 2014) National Toxicology Program (NTP:米国国家毒性プログラム) :13th Report on Carcinogens (2014)
- (OARS 2018) Toxicology Excellence for Risk Assessment (TERA) Occupational Alliance for Risk Science (OARS): OARS WEEL Table (May 7, 2018)
- (OSHA 2018) Occupational Safety and Health Administration (OSHA): OSHA Occupational Chemical Database(確認日 : 2018/08/03)
- (RTECS 2015) US NIOSH: Registry of Toxic Effects of Chemical Substances (RTECS), #:JJ7800000 (update2015)
- (UK HSE 2011) U.K. Health and Safety Executive : EH40/2005 Workplace exposure limits (Containing the list of workplace exposure limits for use with the Control of Substances Hazardous to Health Regulations (as amended)) (2011)
- (化工日 2018) 化学工業日報社 : 16918 の化学商品 (2018)
- (環境省 2006) 環境省: 化学物質の環境リスク初期評価 第5巻 [17] ジフェニルアミン (2006)
- (経産省 2018) 経済産業省 : 優先評価化学物質の製造・輸入数量 (H28 年度実績)
- (厚労省) 職場の安全サイト : 変異原性試験 (エームス・染色体異常) 結果、ジフェニルアミン

(<http://anzeninfo.mhlw.go.jp/user/anzen/kag/pdf/C/C122-39-4.pdf>)

- (産衛 2017) 日本産業衛生学会：許容濃度等の勧告（2017年度）、産業衛生学雑誌 59 巻 153-185（2017）
- （日本バイオアッセイ研究センター 2008a） 中央労働災害防止協会日本バイオアッセイ研究センター ジフェニルアミンのラットを用いた経口投与による 13 週間毒性試験（混餌試験）報告書、試験番号：0669、CAS No. 122-39-4（2008）
- （日本バイオアッセイ研究センター 2008b） 中央労働災害防止協会日本バイオアッセイ研究センター ジフェニルアミンのマウスを用いた経口投与による 13 週間毒性試験（混餌試験）報告書、試験番号：0670、CAS No. 122-39-4（2008）
- （日本バイオアッセイ研究センター 2011a） 中央労働災害防止協会日本バイオアッセイ研究センター ジフェニルアミンのラットを用いた経口投与によるがん原性試験（混餌試験）報告書、試験番号：0684、CAS No. 122-39-4（2011）
- （日本バイオアッセイ研究センター 2011b） 中央労働災害防止協会日本バイオアッセイ研究センター ジフェニルアミンのマウスを用いた経口投与によるがん原性試験（混餌試験）報告書、試験番号：0685、CAS No. 122-39-4（2011）